

日本洋学史 : 日本人とロシア語

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

49

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

2002-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020994>

日本洋学史

——日本人とロシア語

宮 永 孝

鎖国時代、幕府は外洋航海にたえうる大船の建造を禁じたばかりか、交易などのために海外に出かけることも許可しなかった。江戸時代の和船（「弁才船」^{べさいぶね}）——いわゆる千石船）は、日本沿岸を航行するとき、目で陸地をかくにんしながら進むのが一般的であった。

航海はたいいてい順風を見はからって行なわれるのであるが、船体は堅牢にできておらず、ひとたび台風やあらしに遭うと、大きな舵をうばわれ、帆柱を切断し、積荷の多くを海中にすて、あとはひたすら神仏の加護をねがうしかなかった。船頭や水夫^{かこ}は空模様から天候を判断する力量をそなえていても、航海器具や海図などをもたず、航海術にたいする知識は乏しかった。

江戸時代、諸国の物産を大量に江戸や大坂などに輸送する必要から、和船が用いられたのであるが、とくに冬期においてあらしに遭遇し、航行の自由をうしない、漂流する船はあとをたたなかつた。中には太平洋ちゅに吹き流され、遠く北米海岸に漂着するケース、さらには黒潮に乗って、カムチャツカやアリューシャン列島、千島列島のほうまで流される場合があった。

漂流者の多くは行くえ知れず、運よくどこかに漂着し、救助されたとしても、本国へ帰還できるのはまれであった。ほとんどが命をおとしたものとおもわれる。

本稿は、——日本人がカムチャツカ半島において、はじめてロシア語にふれたと考えられる元禄年間から明治初年ごろまで——約百七十年間のロシア語との関わりの歴史について瞥見したものである。

*

ロシア本国で生まれたコサックのウラジミール・アトラソフ(？、一七一―)は、後年カムチャッカの発見者もしくは征服者として知られた。かれは一六九五年に五十人長に昇進し、一六九七年にヤクーツクよりアナディルスク砦(ロシア東部、アナドゥイル川河口右岸)に派遣され、その隊長となった。アトラソフが受けた命令は、新しい土地の発見の可能性をさぐり、その土地をロシアに隸属させることであった。

アトラソフがカムチャッカ半島を探検したのは、一六九六年十二月から一六九九年にかけてであるが、一六九七年の夏、南部のイチヤ川の河畔に滞在していたとき、ナネ川においてカムチャダール人⁽³⁾によって捕えられ、「ルサク人」といわれる「捕虜」⁽⁴⁾のことを耳にはさみ、その者を連行させたのち、じぶんのもとにとどめた。

その正体不明の捕虜は、アトラソフやコサック兵たちと二年間いっしょに暮らし、この間にロシア語を少しばかり覚えた。またその男は、アトラソフに引き取られるまで、一年ほど原住民のあいだで暮らしているうちに、その言葉をすこし覚えた。

アトラソフは、この捕虜と会ったとき、この者はロシア人ではない、と直感し、コリヤーク人の通訳を介して、いろいろ質問をした。その見知らぬ男の容貌は、ギリシヤ人に似ていた。毛髪は黒色であり、体はほっそりしていた。あごにはうすいひげをたくわえていた。アトラソフは、はじめこの男が日本人であることがわからず、インド人とおもったようである。その者の国籍が日本であることが判明するのは、もっとあとのことである。

ともあれ、この日本人は、コサックの一人を見たとき、思わず涕泣したらしい。はじめてロシアの地をふみ、そこに滞在したこの日本人の名前は、

デンベイ (Dembai, Dehne 仁兵衛?)

といった。

この漂流民については、日本側の記録は皆無にちかく、ロシア側にわずかながら史料があるにすぎない⁽¹⁰⁾。のちにデンベイが、シベリア役所(局)で語ったところによると、生まれは大坂であり、父の名はディアサ Dissa といい、製造品の取引を家業としていた。デンベイはおなじく大坂の商店主マタウィン(又兵衛?)の息子アワスティヤ(Awasdijya, 淡路屋?)に仕え、その者の番頭であった。デンベイは、大坂に妻と二人の子供がいた。

一六九五年(元禄八年)の冬、デンベイは、アワスティヤの使用人十五名とともに、一隻の帆船(エドヴニ「江戸船?」、長さ約三二メートル、幅と高さ約八・五メートル)に乗り組み、大坂から七百露里の距離にある江戸にむかった。

船の積荷は、米・酒・緞子(縺子の絹織物)・木綿・白砂糖・氷砂糖・檀材・鉄材などからなっていた。デンベイは、大坂を出港したとき、他の回船三十隻といっしょであったが、船団は航海ちゅう大風に遭い、ばらばらになってしまった。

デンベイの船は、僚船とはなれ、西風にあおられ、どんどん東方に吹き流されて行った。陸影はとっくに見失っていた。大坂を出帆したとき、二ヵ月分の真水を積んでいた。が、それが尽きると、酒で米を炊き、それに砂糖などをふりかけて食べた⁽¹³⁾。

やがてデンベイの船は、流木をひろうと、それを帆樫とし、それに積荷の緞子を帆として、どうにか航走することができた。海上を漂うこと二十八週間、一七九六年(元禄九年)の夏あたり、運よく「グリーンランドの地」(カムチャッカ半島の南岸⁽¹⁴⁾)に漂着した。

デンベイの一行が漂着したカムチャッカ半島は、太平洋に突出し、東のベーリング海と西のオホーツク海とを分け、百二十ほどの火山と温泉が多いことで知られている。が、かれらがじっさいたどり着いた所は、どのあたりなのか定かでない。

当時、カムチャッカ半島から貢税として収められるクロテン(黒貂)は、ロシア政府の高価な輸出品であり、その利益はばく大であった。この半島は帝制ロシアにとって毛皮類の資源地であった。

一行が漂着したのは、カムチャッカ半島の南岸とすれば、ロパツトカ岬(北緯五一度二分、東経一五六度四分)か、ポリシャヤ川の南方オバラ川の河口あたりであろう(G・P・ミューラーの説)。カムチャッカの海岸は砂と小石からなり、岬のうえには雑草が茂り、起伏した砂丘がみられる所であった。

カムチャッカは、長さが千二百キロ、面積は三十七万平方キロである。大小の川が半島の両岸から海に注いでいる。大きな川が三つ

あり、それらは

ポリシヤ川⁽¹⁷⁾ (一七二五年に発見された、船が航行できるほどの大きな川)

アヴァスカ川 (北西から南東に流れ、アヴァスカ湾に注ぐが、カヌーまたは小型の船しか通れない)

カムチャッカ川 (二つの支流をもつ最大の川、カムチャッカ湾に注ぐ、二百マイルにわたって船が航海できる)⁽¹⁸⁾
である。

おそらく、デンベイ一行の船が溯行したのは、ポリシヤ川であろうか。

カムチャッカ半島を最初に発見したのは、ロシアの商人ウソーフの番頭によって組織された一隊であった。かれらは一八四八年^(慶安元年) コサツクのデジュネフ、引率者のフォードル・アレクセーエフといっしょに航海に出たが、船は南のほうに流され、やがてカムチャッカ川の沿岸に漂着した。⁽¹⁹⁾ 乗組員は、好戦的な部族コリヤーク人に殺された。

やがてデンベイの一行は川をみつけ、そこをさかのぼって進んだ。しかし、カムチャッカはへとへとになっている漂流民にとって、安らぎの場ではなかった。かれらはたちまち弓矢やおのをもった二百名ほどのクリール人(カムチャダール人と千島アイヌ人との間に生まれた種族)の襲撃をうけ、船中の積荷をあたえ、かろうじて殺害をまぬがれた。

デンベイは、現住民に襲われたとき、右手の指に矢が当って負傷した。大坂を出帆したとき、乗組員は十五名であった。が、航海中の大あらしにより、二名が行方不明となり、さらに二名が失明し、上陸のさいにこの二名はクリール人によって殺された。

デンベイは、一ヶ月ほど現住民のもとで暮らしたのち、クリール人に連れられてカムチャッカ川へ連れてゆかれ、その支流のナナ川のカムチャダール部落で暮らすようになり、ウラジミール・アトラソフと出会うまで約一カ年⁽²⁰⁾をすごした。

千島列島やカムチャッカ半島の原住民は、粗食であったようだ。かれらは魚獣の肉や百合根⁽²¹⁾など食用とした。魚を捕えると、それを穴蔵のなかに投げ入れ、その上を草木でおおい、醗酵するまでほっておく。やがてそれを桶に移すと、そこへ焼け石を入れて暖め、さらに茸^(きのこ)のようなものを入れて飲む。それは一種の醗酵酒のようなものだが、デンベイたちにとって、とても飲める代物ではなかった。

デンベイたちは、木の根(百合根か)や草や魚などを食べて飢えをしのいだという。カムチャッカ半島の地勢は、だいたい山地で

ある。谷やなだらかに起伏している高台が多く、山の斜面はすばらしい牧草地を形成していた。しかし、夏といえど霜が降りることがよくあり、穀物は育たなかった。

キャベツ、カブ、ダイコン、ビート、キウリ、ジャガイモなどが育てられるようになったのは、十九世紀のことか。カムチャッカの主な産物は、毛皮や獣皮であり、同地にはクロテン、エゾイタチ、キツネなどが多く生息し、魚や猟獣が豊富であった。山や谷に行く⁽²²⁾と食用になる小果実がたくさんとれた。

この間にデンベイは、カムチャダール語（極北語の一種、カムチャッカ半島の一部で話される）をすこし解するようになった。かれはアトラソフと会ったとき、ロシア人の食事が清潔なことを知り、飢餓に陥らないために、かれらのところに行った。

アトラソフらロシア・コサックの一行は、デンベイを原住民から引き取ると、シベリアへ連れて行くことにした。一行はアナディルスク岬にむかい、一六九九年^(元禄)七月二日そこに到着した。そのうちアトラソフは、従者、国庫財産（毛皮貢税のこと）、デンベイら捕虜とともにヤクーツク（ロシア東部レナ川左岸に位置）にむかった。

S・P・クラシエニンニコフの『カムチャッカとクリル諸島史』（一七六四年）には、

アトラソフがこの旅からヤクーツクにもどったのは一七〇〇年七月二日のことだった。かれは救出してやった日本人をともなっていた⁽²³⁾とある。

しかし、デンベイは雪靴をはいて五日ほど歩くと、足を腫らしてしまい、歩けなくなり、アナディルスク岬へもどらざるをえなくな⁽²⁴⁾った。アトラソフは旅の途中で隊長ポストニコフと会ったので、デンベイの足がなお⁽²⁵⁾たら、従者をつけてヤクーツクへ送るように命じ、道中の路銀として赤狐を三十五匹を托送した。これは「この捕虜が途中で荷ざりを雇うときの支払い用」として与えられたものであった。アトラソフは一七〇〇年^(元禄)にヤクーツクにもどったが、商人ドブルーニンの中国製品をつんだ船をツングウスカ川で略奪したので、しばらく投獄された。その後釈放されると、もとの地位に復帰した⁽²⁶⁾。ミューラーの著書によると、当時のアトラソフの

階級は大佐、一七〇六年まで獄中であつたようだ。のちアトラソフは、カムチャダール人の叛乱を鎮めるためにカムチャッカに派遣され、一七一一年に蜂起したコサツクの手で殺された。

やがてデンベイは、ヤクーツクに到着した。当地の長官（知事）は、かれをモスクワに送致することにし、衣服（鹿皮と綿製）をあつたほか、道中の食費および靴代として約二ルーブル支給した。⁽²⁷⁾

デンベイがロシア本国に召致されたのは、ピョートル一世（一六七二〜一七二九、ロシア皇帝、在任一六八二〜一七二五）の命によるものであつた。そのころ大帝は、オホーツク海から太平洋、アメリカ、千島、日本方面の探険を計画し、とくにカムチャッカから日本への航路の発見も念頭にあつたから、しぜん日本語通訳を養成する必要に迫られていた。

アトラソフの報告によると、デンベイはみずから「エンド人」（江戸人？）と称していた、というが、まだこの者がはたして日本人かどうかロシア当局にはわかつていなかった。

ともあれ、デンベイはコサツクの護衛⁽²⁸⁾とともにヤクーツクよりモスクワへと旅立った。ロシア政府は、極東の国々と友好関係をもつことに関心があつたから、デンベイの送致にはとくべつの配慮をし、一七〇一年^(元禄十四年)一月一日、シベリア庁はヤクーツク当局に指令を發し、軍人（コサツク）数名に「官金をもたせ、異国人一名を帯同して大至急モスクワへむかわせ、道中万遺漏なきよう、同道せるその異国人をたいせつにし、けつして衣食に不自由させることのないよう」命令した。⁽²⁹⁾モスクワに送り届けられたのは、一七〇一年^(元禄十四年)十二月末のことであつた。モスクワにいる間にデンベイは、アトラソフよりも地理に明るいシベリア庁の役人の尋問をうけ、そのときはじめてデンベイの国籍が判明した。⁽³⁰⁾そのきっかけになつたものは、ドイツ人が書いた挿絵入りの日本島についての書物（ヴァレニウスの『日本誌』？）であり、それをデンベイに見せ、中味について尋ねたところ、まちがいないと証言したことから、日本人だとわかつた。

そのころデンベイは、ロシア語の語いがふえており、簡単な答弁はできたようである。外国にひじょうに興味をもつていたピョートル一世は、一七〇二年^(元禄十五年)一月十九日⁽³¹⁾、モスクワの東に位置するプレオブラジュンスコエ・セロ *Preobrazhenskoe Selo* 村のプレオブラジュンスキー宮⁽³²⁾においてデンベイを引見し、長時間にわたつて、日本および千島について質問した。

同日、デンベイはロシア皇帝よりロシア語の学習を命じられ、それに習熟したら、何名かのロシア人の子弟に日本語の読み書きを教えるように言いつけられた。日給は五カペークと定められた。⁽³⁴⁾なお、デンベイは船頭だけに日本語の読み書きができたし、人物は礼儀正しく、理知的であったという。

一七〇二年四月、勅命により、デンベイはシベリア局より砲兵局に送致されることになり、同局においてロシア語の学習がはじまった。数年後の一七〇五年^(宝永二年)十月十六日、ピョートル一世は、Y・V・プリュス少将にデンベイのロシア語学習や日本語教育のようすについて調べるよう命じた。が、回答はなかったようである。

けれど一七〇五年^(宝永二年)十月二十八日の勅命により、ペテルスブルクに、ロシアで最初の、

「日本語学校」

がつくられ、デンベイはその初代の教員となった。この学校は、元老院の管轄に属していた。

日本語教師としての待遇は軍曹なみであり、俸給は一日につき五カペーク⁽³⁵⁾であった。

デンベイは、日本語を教えるしごとが終わったら、日本へ送り還してやる、といった約束をたのしみにし、職務に精励していたが、故国に帰ることはできなかった。一七〇七年^(宝永四年)ロシア語をあるていど覚えたデンベイは、M・P・ガガーリン公の邸宅（トヴェルスカヤ通り）に引きとられた。⁽³⁶⁾

一七二〇年^(宝永七年)、デンベイは日本へ帰してほしいと述べた請願書を出した。けれどピョートルはその願いを容れなかった。もともとデンベイは、ロシア正教を強制されなかったが、やがて洗礼をうけ帰化することを命じられた。かくしてデンベイは帰国を断念し、洗礼をうけてガブリエル⁽³⁷⁾ *Gavrill (Gabriel)* と名のり、そのまま異郷において淋しい一生をおえた。⁽³⁸⁾

かれはどこで、いつ亡くなったものか明らかでない。おそらく、ペテルスブルクで亡くなったものと思われる。

ロシア政府は、日本語教師のデンベイが亡くなった場合、日本語教育に支障が生じるので、シベリア局は、ヤクーツクの長官に、こんごカムチャッカ海岸に漂着する日本人がおれば、ペテルスブルクに送致するよう、命じた。⁽³⁹⁾

一七二〇年^(宝永七年)四月、一隻の日本の帆船がカムチャッカのアヴァチャ湾北方のガリギル湾に漂着した。⁽⁴⁰⁾生存した乗組員のうち十名

は上陸したが、かれらはカムチャダール人の襲撃をうけ、四名が死亡し、のこり六名は捕虜となった。その後このうちの四名はロシア人(コサック)によって救われた。

S・P・クラシエニンニコフの『カムチャッカとクリル諸島史』(一七六四年)によると、コサックの隊長チリコフ *Tcherkof* は、カムチャッカのポプロウエ海岸の土着民を討伐したとき、四名の日本人を救出したとある。

(四月?)
二日、日本のバーク型帆船が一隻、海狸(かいり、*ビバ*)海岸に漂着した。五十名の部下を引きつれて討伐に出かけたチリコフは、現住民のとりこになっている日本人を四名救出した。⁽⁴²⁾

コサックによって助けられたこの四名の日本人は、カムチャッカ要塞に連れてゆかれ、そこで一年ほど暮らした。

その間にわずかながらロシア語を覚えたが、ほとんど進歩はみられなかった。コサックは日本人にあれこれ尋ねたが、ことばがよく通じず、知り得た情報はきわめてわずかであった。⁽⁴³⁾

日本人は、われわれの国は「エド」といい、その附近には七つの国土が互いに近接していると語った。エド国は、カムチャッカ岬(すなわちロバットカ *Lopatka* 岬)の前方にあたるペンジンスコエ海(すなわちオホーツク海)の島にあり、われわれの国においてもまたよその国にても、金銀が産出され、緞子(緞子の絹織物)、南京木綿、ふつう木綿などが織られている、とも語った。⁽⁴⁴⁾

ウエルフネ・カムチャッカ駐在の収税吏は、かねてヤクーツク当局より、日本人送致の命をうけていたので、一七二一年(正徳元年)四名の日本人捕虜の中から、

サニマ *Sanima* (*Sana* ともいう、生誕地は蝦夷の松前?)

なる者をヤクーツクに送った。

イワン・コズイレヴスキー *Ivan Kozirevskii* は、一七二三年カムチャッカ要塞の隊長ワシリー・コレソヴより千島探検の命をうけると、ポリシャヤ川で小型船をつくり、武器(青銅砲二門、火繩銃) 弾薬その他の物質をつみ、水先案内と通訳をかねた日本人捕虜

サナ(サニマのこと)⁽⁴⁶⁾をともなつて、千島の最初の二島——シムシユ島(占守)とパラムシル島(幌筵)あたりまで調査した。

一七二四年(正徳四年)⁽⁴⁷⁾、サニマは同胞と別れ、ペテルスブルクへむかった。旅の途中、トボリスク(ロシア中部、チュメニ州南西部の河港の町)で、スウェーデンの著名な地図学者シュトラレンベルグと会い、日本についての情報を提供したらしい。

サニマは同年、露都に着くのであるが、かれの送致は、いうまでもなく、ロシア人に日本語を教えさせるためであった。

G・P・ミューラーの『ロシア人による…への航海と発見』⁽⁴⁸⁾(一七六八年)には、

二人の日本人のうちサニマという者は、皇帝の命により、一七二四年ペテルスブルクに送られた。日本人はやがて質問に答えられるようになるまでロシア語をじゅうぶんに教わつた。⁽⁴⁹⁾

とある。首都の支配層や商人層らは、サニマから得られる情報によって、日本にたいする関心を強めた。⁽⁵⁰⁾

やがてサニマは、デンベいの助手となり、日本語を教えるようになった。のちロシア正教に帰依し、イワン Ivan⁽⁵¹⁾といつた洗礼名をうけ、ロシア婦人と妻帯したらしい。ともあれ、サニマの末路については明らかでない。デンベいおよびサニマの死亡年月は不明であるが、播磨櫛吉の研究によると、兩人は一七三九年(元文四年)⁽⁵²⁾にすでに死去していたものと推定されるという。もと順天堂大学教授の村山七郎は、サニマは「蝦夷地検分のため松前藩の人々とともに船でかけ、漂流したと見られる。サニマ(三右衛門)は松前で生まれ、松前のアイヌ語通詞であつたという結論は誤りであるまいと思う」とのべている。⁽⁵³⁾

デンベい、サニマにつづいてカムチャッカに漂着したのは、十七名の日本人であつた。

一七二九年(享保十四年)⁽⁵⁴⁾六月八日、カムチャッカのロパツトカ岬とアヴァチャ湾との間の海岸に一隻の日本の帆船が流れついた。それは「ワカシマル」Wakashimar⁽⁵⁴⁾(若潮丸?)という薩摩の船であつた。同船は、米・書物用紙・絹織物・錦織物・麻布などをつみ、享保十三年(一七二八年)十一月にサツマ(現・鹿児島)⁽⁵⁵⁾を出帆し、大坂にむかつた。が、同月八日台風に遭遇し、洋中に吹き流され、十一月より翌年の六月にいたるまで七ヵ月間漂流した。

舵や帆柱をうしなつた船は、どこへ行くとも知れず、ただ洋上をただようしかなかった。幸いカムチャッカの沿岸に漂着することができ、積荷の一部を陸に揚げ、数日天幕を張って起居していた。その間に海岸より五露里^{ウエネスト}の地点に仮泊していた本船は、強風によって姿を消してしまつた。

陸上での生活をはじめて二十三日目に、コサック五十人長のアンドレイ・シティンニコフ *Andrei Shinnikov* は、カムチャダール人をともなつてやって来たので、日本人は大いによるこび、救済を求めて数々の贈物をした。シティンニコフははじめのうち遭難者を友好的に遇していたが、しばらくして、日本人の本船を捜索発見すると、その貨物のすべてを掠奪しようと思つた。

「ワカシマル」は、日本人の野営地より約三十露里はなれたところで漂っていた。シティンニコフらは、その船を発見すると、その積荷を奪つたあげく、破壊してしまつた。

それを目撃した日本人は、小舟にのつて海に逃れようとしたが、シティンニコフの命を受けたカムチャダール人に追跡され、矢を射られ、槍で刺され、あるいは刀（日本人から贈られたもの）で斬られ、あるいは水中に身を投じて溺死した。生き残つた者は、つぎに記す二名だけであつた。

ゴンザ（一七二七—一七三九、Gonza 権佐?）

ソーザ（一六九六—一七三六、Soza 惣左?）

ゴンザは、この襲撃により腕に傷ついた十一歳の少年であり、航海術を学ぶために水先案内の父とともにワカシマルに便乗したものであつた。ソーザは、水中から引き揚げられた年輩者（商人の手代）であつた。

シティンニコフは、日本人から奪つた物品のすべてと二人の日本人捕虜をともなつてウエルフネ・カムチャッカにむかい、そこに到着すると、掠奪品の一部をもって役人を買収し、犯行をかくすことに努めたが、掠奪がのちに発覚し、罪科を問われた。

一七三三年^(享保十八年)、新任の長官ノヴゴロドフがヤクーツクから着任すると新たな調査がはじまり、旧悪のすべてが露見した。シティンニコフとかつての取調官は、逮捕され、投獄ののち、絞首刑となつた。⁽⁵⁷⁾

これより先に、日本人漂流民の殺害と掠奪の事件は、洩れなくアナディルスク砦駐在のパウルツキーに報告され、一七三二年^(享保十一年)

同人は日本人をヤクーツクに送るよう命じた。

一七三一年ゴンザとソーザは、ヤクーツク政庁の命により、ニージニ・カムチャックを経てアナディルスク砦へ護送され、そこからヤクーツクへ送られると、当地に五週間滞在した。⁽⁵⁹⁾ さらにそこからトボルクに送られ、ここで四週間滞在し、その後モスクワのシベリア庁に送られた。モスクワには一週間滞在し、そのあとペテルスブルクに送致された。ペテルスブルクに到着したのは一七三四年^(享保十九年)のことであった。旅行中の費用は、すべて国庫より支弁され、その待遇もはなはだ厚かった。

ペテルスブルクに着いた兩人は、元老院^(セナト)に引き渡された。やがて二人は、元老院の上奏により、時の女帝アンナ・イヴァノヴナ(一六九三〜一七四〇、一七三〇〜四〇在位)の引見をうけた。女帝は祖国日本のことを尋ねたのち、侍従武官長A・I・ウシャコフに命じて元老院から日本人に衣服と金銭を支給させた。⁽⁶⁰⁾

一七三四年勅命により二人は、幼年学校附の僧侶(修道司祭)⁽⁶¹⁾のもとで、ギリシャ正教教義にしたがって教育をうけはじめた。そして同年十月二十日、同校の礼拝堂において洗礼をうけると、⁽⁶²⁾ それぞれつぎのように姓を改めた。

ゴンザ(十五歳)……………「洗礼名」デミアン・ポモルツセフ *Demian Pomortsef*

ソーザ(二十八歳)……………「洗礼名」コジマ・シュリツ *Kozima Schuits*

ゴンザ、すなわちデミアンは、頭がよく、ロシア語を覚えるのが速かったため、さらに聖アレクサンドル・ネフスキー神学校においてロシア語文法を教わり、ついでコジマとともに帝国学士院で学習を命じられた。⁽⁶³⁾

デミアンがロシア語の読み書きを習った聖アレクサンドル・ネフスキー神学校は、ネヴァ河畔の同名の修道院 *Алекса́ндро-Невска́я Пру́тская Па́вра, Alexander Nevski Monastery* (「アレキサンドル・ネフスキー修道院」)のなかにあった。ペディカーの『ロシア』(一九一四年)によると、この修道院は堀と外壁によって囲まれ、広大な敷地内には十二の教会といくつかの礼拝堂があると
いう。

ペテルスブルクに送られて来たゴンザとソーザは、はじめ政府の建物のなかに保護され、ついで一七三五年^(享保二十年)帝国科学アカデミーへ引き渡された。⁽⁶⁴⁾ 翌年、同アカデミーに、

「日本語学校」

が開設された。

ゴンザは、日本文字をよく知らなかったようだが、天才肌の少年⁽⁶⁶⁾でロシアをよく覚え、日本語の教え方もじょうずであったとされる。ゴンザとソーザは、兵士の子弟

ピョートル・シェナヌイキン *Petr Shennuykin* (一七六一年五月、死去)

アンドレイ・フェネフ *Andrei Fenev*

をはじめ、その他三名の学生に日本語を教えはじめ、かれらは終生この学校の生徒としてまっとうした⁽⁶⁶⁾。

日本語学生は、現役兵とおなじ手当を給与され、日本語を真剣に学んだものには、ほうびが出、一七三六年^(元文)には、日本語学習を奨励する目的で、学生一名につき一日十五カペーク支給⁽⁶⁸⁾されることになった。

ゴンザとソーザは、「ワカシマル」に、和書が取りのこされていた、と語ったので、政府はイルクーツクに訓令を発し、難破船を探索し、日本の書物および日本語で書かれた書きつけを至急露都に送付するよう命じた⁽⁶⁹⁾。

ところで、ゴンザとソーザは、ペテルスブルクのいかなる建物で日本語を教授したのであろうか。日本語の教場があったのは、「帝国科学アカデミー」(*Akademija Nauk, Imperial Academy of Sciences*)

の本館の一室⁽⁷⁰⁾であったようだ。

図書館と博物館をかねている同アカデミーは、別名「クンストカンマー」(ドイツ語 *Kunstkammer*) といひ、この中に図書室、ピョートル大帝の人類学・民族学博物館、ピョートル大帝課、コイン保管庫、植物博物館、ピョートル大帝の地質学博物館、アジア博物館、動物博物館などが入っている⁽⁷¹⁾。

その所在地は、ワシレーフスキー島 *Vasilievskaya* であり、ネヴァ川にかかる宮殿橋(ドヴォルツォーヴィ・モスト *Dvortzov Most*) をわたり、河岸を右手に行くと、旧「帝国公立図書館」があるが、そのとなりの建物である。ピョートル大帝によって帝国科学アカデミーの設立計画がたてられたのは一七二四年⁽⁷²⁾であつたらしく、その没後の一八二八年⁽⁷³⁾に現在の建物が完成したという。

帝国科学アカデミーで、日本語を教えるようになったゴンザとソーザおよび日本語をまなぶロシア人子弟の監督の任にあったのは、アンドレイ・イヴァノヴィッチ・ボグダーノフ *Andrei Ivanovich Bogdanov* (一七〇七〜六六、当時、帝国科学アカデミーのロシア図書管理人「司書補」⁽⁷⁴⁾、のちペテルブルク大学附属図書館次長⁽⁷⁵⁾)であった。かれは「ソーザ、ゴンザ、ロシア人子弟を自分のところにひきとって自らロシア語をおしえ、また日本語学習を組織した」(『帝国科学アカデミー史料』第三巻、一七三六・五・二五付)という。ボグダーノフは、六種類の日本語の手引きを編輯した。それらは

- 一 「露日語彙集」 一七三六年
- 二 「日本語会話入門」 一七三六年
- 三 「簡略日本文法」 一七三八年
- 四 「新スラブ日本語辞典」 一七三六・九〜一七三八・一〇まで
- 五 「友好会話手本集」 一七三九年
- 六 *Orbis pictus* (一七三九年、チェコのヤン・アモス・コメンスキー「二五九二〜一六七〇」のラテン語教科書をボグダーノフがロシア語に訳し、さらにそれを日本語に訳したもの)⁽⁷⁶⁾

などであった。

この六書は、ロシア語で書かれ、刊行されることなく、稿本のまま、「帝国科学アカデミー」の書庫に保管され、のちペテルブルク大学附属図書館に移されたらしい。

これらの稿本の「序文」によると、「ゴンゾ⁽⁷⁷⁾は十一歳の時に日本を離れたので殆んど日本の文字を知っていなかった。日本語は彼にとって支那語(漢字のことか——引用者)同様に非常に困難であった」ということである。

「簡略日本文法」(一七三八年)は、右側にロシア文法がボグダーノフによって、左側にそれに対応する薩摩方言文法がゴンザによって書かれているという。⁽⁷⁸⁾この稿本は、昭和四十年当時、ネヴァ河畔のニコライ二世の叔父の旧邸宅内にある「アジア諸民族研究所」(昭和三十年代は「東洋学研究所」と呼ばれた)の古文書部に保管されていた。

「帝国科学アカデミー」ではじまった日本語教育は、その緒についたばかりのとき、ソーザ（コジマ・シュリツ）がまず亡くなり、その数年後にこんどはソーザ（デミアン・ポモルツセフ）が没した。両人はいずれも科学アカデミー勤務中に亡くなった。かれらの没年は、

ソーザ……一七三六年^(元文)九月十八日（四十三歳）

ゴンザ……一七三九年^(三元)十二月十五日（二十一歳）

である。

二人の埋葬地についてのべると、ソーザはアドミラルテイスカヤ *Admiralteiskaya* 区のウォズネセラヤ *Vozmizhenya* 寺院（「主の昇天」の教会⁽⁷⁹⁾）に、ゴンザはカリンキナヤ寺院にそれぞれ葬られたということである⁽⁸⁰⁾。

両人が亡くなったとき、ロシア側はろうをもつて二人の死面^{デスマスク}をつくったが、その製作者は彫刻家コンラド・オスネルであった。その二つの首像は、いま「科学アカデミー」のなかの「人種学・民族学博物館」に保存されているようだ。また死亡したソーザは、一七三六年画家ブルツケルによって描かれた⁽⁸¹⁾というが、その絵はまだ発見されていない。

ペテルスブルクの日本語学校は、教師を二人もうしなったが、生徒たちはボグダーノフの指導のもとに学習をつづけた。ピョートル・シュナイキンとアンドレイ・フェネフの二名の生徒は、一七四二年^(寛保)シパンベルル海軍少佐の第三回日本探検のときに通訳として随行したが、艦隊は日本本土に寄らなかったので、学んだ日本語をじっさい用いる機会にめぐまれなかった⁽⁸²⁾。

ついでカムチャッカ半島にちかい、千島列島のオンネコタン島に漂着したのは、奥州南部（現・青森県下北郡）佐井村の竹内徳兵衛ほか十六名がのつた「多賀丸」であった。一七四四年^(延享)十一月十四日、一行の船は大豆や魚の糞などをとんで佐井の湊を出帆し、江戸にむかった。

が、途中で台風にあい、北方に流され、翌年の春オンネコタン島に漂着した。この島に着いたとき、生存者は十名であった。徳兵衛の千二百積みの新造船に乗り組んでいた日本人全員の氏名は判然としないが、名前がわかるのは、つぎの十三名である。

佐井村 竹内徳兵衛

のちイルクーツクで暮らし、同地で死亡。

佐井村 勝右衛門

グリゴリイ・スヴィニンと改名し、イルクーツクで暮らす。

奥戸村 長松⁽⁸³⁾

フィリップ・トラベズニコフと改名。

宮古浦 長作⁽⁸⁴⁾

ワシリイ・パーノフと改名。

伊兵衛

ピョートル・チョールヌイと改名。

久太郎

マトヴェイ・ポポフ・グリゴリエフと改名し、カムチャッカのポリシェレック村に残る。ロシアの日本語通訳

奥戸村 利八郎

ピョドロの妹を妻とした。一七四七年に死亡。

七五郎 (八兵衛?)

アンドレイ・レシェートニコフと改名。

磯治

フォーマ・メリニコフ(?)と改名。

三之助 (佐之助?)

イワン・タターリノフと改名。

久助

イワン・セミョーノフと改名。

利助(?)

パーヴェルと改名。

庄右衛門

スウィニンと改名。

一行十三名⁽⁸⁵⁾は、カムチャッカに漂着すると、同地の徴税吏は、かれらに洗礼をほどこし、ロシアに帰化させ、うち九名をヤクーツクに送致した。のちヤクーツクの当局は、このうちの四名だけを残し、他の五名(メリニコフ *Meinikov* (磯治)、レシェートニコフ *Reschenikof* (七五郎または八兵衛)、スウィニン *Swinin* (庄右衛門)、パーノフ *Panof* (伊兵衛)、チョールヌイ *Chornui* (久太郎))をペテルスブルクの日本語学校に送った⁽⁸⁴⁾。

このうちのメリニコフとレシェートニコフの両人は、一七五三年^(宝暦三年)ペテルスブルクで死亡したという。

一七五三年^(宝暦三年)ロシア政府は、東部シベリア近海にある陸地、島嶼を測量するために探検隊を組織するとともに、それまでペテルスブルクにあった日本語学校をシベリア総督ミヤトレフの管轄のもとに置くことにした。

翌一七五四年^(宝暦四年)六月七日、三名の日本人教師(二名は前年にペテルスブルクで死亡)——スウィニン、パーノフ、チョールヌ

イらは、それまで日本語を勉強していた、

ピョートル・シエナヌイキン

アンドレイ・フェネフ

らとともに、イルクーツク（東シベリアの中心的な町、イルクート川とアンガラ川の合流点に位置）に到着した。

同月、イルクーツクに「航海学校」（ザモルスカヤ通り、後代の「中央国民学校」）が開設されたとき、一行は同校生徒らといっしょに校舎に収容された。新たに「日本語学校」を開くにさいして、その校長は航海学校長が兼ねることになった。⁽⁸⁵⁾

ヤクーツクに残された四名の漂流民は、一七五四年一月九日付で通訳官に任じられ、中尉相当の待遇をうけた。またイルクーツクに移った三名は年俸百五十ルーブルを給せられた。

一七五九年^(宝暦九年)、航海学校の生徒六名が日本語学校に転学し、一七六〇年^(宝暦十年)には、日本語教師十名、生徒十五名にまでなった。その後、生徒や教師のなかから死亡者が続出するようになった。

漂流民教師のうち、つぎの二人も死亡した。

スウィニイン（ペテルスブルクから当地に移った者、一七六三年一月没）

タタリーノフ（ヤクーツクに残った者、一七六五年八月没）

一七六七年^(明和四年)には、教師五名、生徒八名にまで減少した。その後、イルクーツクの日本語学校はますます衰微して行った。

漂流民上がりのにわか日本語教師はみな亡くなり、生徒もわずか三名となり、上級者のトゥゴルコフが教鞭をとっていた。⁽⁸⁶⁾ 同人は、竹内徳兵衛一行の久太郎より、十二歳から十五歳まで三カ年間に日本語をまなんだ者である。

一七八九年^(寛政元年)二月、新たに日本人漂流民がイルクーツクにやってきた。伊勢の白子村^{しよこ}の百姓彦兵衛の持船「神昌丸」の船頭光太夫以下十七名が、紀州藩の回米をつんで白子浦を出帆し、江戸にむかったのは天明二年（一七八二）十二月十三日のことであった。が、やがて時化^{しづ}にあい、舵を折られ漂流し、翌年の七月、アリューシャン列島中の一小島「アムチトカ」（長さ約十五マイル、横の長さ約五マイル）に漂着した。

その後、生存者は、ロシア人によって救出され、カムチャッカ、オホーツク、ヤクーツクをへてイルクーツクにやって来たときは、十七名いた仲間は六名になっていた。郷里の伊勢を出てから数えて六年余りのちのことである。光太夫らはイルクーツクの町に入ると、蹄鉄屋や馬丁たちが集まり住むウシャコフカ *Ushakovka* 地区（ウシャコフカ川がアンガラ川に注ぐ地帯）のロシア人の蹄鉄工ウォルコフの家にやっかいになり、のち航海学校内に付設されている日本語学校に寄寓した。

光太夫はロシア政府から帰化するよう勧められるが、帰国許可を請願のため、新蔵と磯吉をともない、エリク・ラックスマン（フィンランド人、ペテルスブルク大学の学術通信員、イルクーツクで東部シベリアの動植物・鉱物・地質研究に従事）の案内をえて、ペテルスブルクにむかった。露都において光太夫は、エカテリナ二世（一七二六〜九六、一七六二〜九六在位）の謁見をうけ、のち帰国の許可をえることができた。

イルクーツクに残った水夫の新蔵（伊勢国若松村百姓）と庄蔵（生国は新蔵とおなじ）は、兩人とも凍傷にかかっており、両足を切断し義足を用いていたらしい。二人は一生不具となったためか、帰国の望みをすて、ロシアにとどまることに決した。ロシアに帰化することにした兩名は、つぎのように改名した。

新蔵……〔洗礼名〕ニコライ・コロツイギン *Nikolai Kolouigin*

庄蔵……〔洗礼名〕ヒョードル・シトニコフ *Fedor Simkof*

新蔵は当時、四十二、三歳であったようで、ロシア女性（名はマシウエヤノ・ムシヘイオナ）をもらいのち二男一女をもうけた。が、妻が病死したので、後添い（名はカチリナ・エキムフモオナ）をもらった。息子のひとりは一七九九年（寛政十二年）に日本語学校の生徒となり、銀五十枚を給せられた。

庄蔵ははじめ新蔵宅でやっかいになっていた。けれど一七九六年（寛政八年）十一月、仙台漂流民五名がイルクーツクにやって来たのを機に家を出ると、かれらといっしょに暮らし、その世話をうけながら死んでいった。かれは在露中、妻帯しなかったようである。

ともあれ、一七九一年（寛政三年）九月、新蔵と庄蔵は正式に日本語学校（当時は、小学校内に併置されていた）の教師に任命され、イルクーツク知事の命令で、中学生三名と本国から送られてきた神学生三名が、かれらの生徒となった。待遇は小学校教師とおなじであり、

年に銀百枚の給金をもらった。⁽⁸⁷⁾のち少尉^{少尉}に相当する官に進み、薪・ロソクなども支給された。

ロシア宮廷の顧問官であったG・H・フォン・ラングスドルフの『航海と旅行』⁽⁸⁸⁾(一八一三年)に、新蔵のことが出てくる。

十五名のうち、五名だけが帰国の道をえらび、のこりの者はじぶんの意志でイルクーツクにもどった。そのうちの一人は、名をニコラウス・コロツィン *Nicolaus Koloshin* というが、いまイルクーツクのギムナジウムの日本語の教授をつとめ、六名から八名の生徒を指導している(上巻、二〇八頁)。

新蔵はもともとが水夫^{水夫}であっただけに国語(日本語)の素養は乏しく、ひらがなだけはどうやら自在に読んだり、書いたりできたかとおもえる。しかし、漢字の知識はきわめて貧弱であったようだ。

『北辺探事』には、「新蔵杯やうく仮名書斗り出来候者にて」とか「先年松前にて相渡されし御書付(松平定信が遣日使節ラックスマンに与えたかなまじりの書簡)、新蔵手際^{手際}にては悉く読みわけかね」とあるくだりは、よくかれの日本語の実力のほどを示しているようだ。

新蔵は、イルクーツク滞在ちゅうの一八〇五年(文化二年)の初冬、ドイツの東洋学者ハインリッヒ・ユリウス・クラップポルト(一七四三〜一八一七)と会い、同人から日本語についてたびたび質問をうけた。クラップポルトはロシアに招聘され、ロシア学士院に身を置いていたが、この年日本語学校の教師として着任するためイルクーツクにやってきた。

かれはこの町に滞在ちゅうに、林子平(江戸後期の経世家、一七三八〜九三)の『三国通覧図説』(日本・蝦夷・小笠原諸島・琉球などに関する解説書)を手に入れ、新蔵の協力を得て、一八三三年(天保三年)五月、パリで刊行した。すなわち、『三国通覧図説』 *Sans kokuf tsou ran to sets, ou aperçu général des Trois Royumes. Traduit de l'original Japonais-chinois, par MR. J. Klaproth, Paris. Printed for the Oriental Translating Fund of Great Britain and Ireland Sold by John Murray & Pars bury, Allen, & C, M. DCC. XXXII [1832]* がそれである。

クラップロートは「訳者による序文」*Préface du traducteur*の中で、新蔵から日本語の疑義について教示をうることができ、重宝したと述べている。

……シベリアのイルクーツク滞在中の一八〇五年のこと、意味がはっきりしないくだりについて意見を求めたことがあった。相談相手となったのは伊勢の国で生まれた、シンソウウ *Sin sou* という名の日本人であった。かれはロシア名をニコラス・コロツィギン *Nicolas Kolotzhin* といつた。

この男はあまり教養がなかったけれど、その母国語に関するすべての点で、わたしには十分に役立った。しかし、かれは日本で最もよく使われる漢字でさえも、ほとんど知らず、同じように発音される漢字に至っては、たびたび混用した（一〜二頁）。

しかし、ロシア語のほうはかなり運用力があつたようで、こみいった話し合いや役所に出す書類など、自由自在のものにしていたという。「オロシヤ言葉並よみ書きの事も、よく覚え候趣にて、入組候掛ヶ合事、又は官辺の願書、其外の書物等も、彼方（ロシア——引用者）の事成ば、自在に認取（書くこと——引用者）候様子也」（『環海異聞』卷之三）。

後年、新蔵は『日本および日本貿易について、または日本諸島最近の歴史的・地理的叙説』（一八一七年ペテルスブルク刊）といつた七十ページ足らずの小冊子をロシア語で著わした。が、これは漂流民の著述としては驚嘆に値する出来事といわねばならない。

新蔵は、上級生のトゥゴルコフ（のち日本語通訳となる）とともに、仙台漂流民十四名（儀兵衛「儀平」、善六、辰蔵、左太夫、銀三郎、茂次郎、左平、太十郎、津太夫、清蔵、巳之助、吉郎治、八三郎、民之助）らの世話をし、このうち帰国する者たちをペテルスブルクまで同行し、皇帝に謁し、クロンシュタットまで見送つた。が、一八一〇年（文化七年）イルクーツクにおいて、五十二歳を一期として亡くなった。

庄蔵は助教として日本語を教えたようだが、光太夫の一行がロシアを去ってから、同郷の仲間である新蔵と不仲になり、独往の人生をあゆんだ。新蔵は頭がよく、目先のきく人間であつたが、人情に厚くはなかつたらしい。また庄蔵はかねて梅毒にかかつており、イ

ルクーツクに着いて十日ほどしてから、凍傷のために膝から下を切断せざるをえなくなった。

不具の身となり、いっそう帰国がおぼつかなくなると、帰国をあきらめた新蔵とともに教師となって再出発したが、なにかと新蔵にたいして、ひがみやねたみを感じるようになり、ついに兩人の関係は破綻するにいたったようだ。光太夫は帰国の途につくとき、入院中の庄蔵を宿に呼びだし、悲愴な気持でさいごの別れを告げた。

このとき光太夫は、帰国のことをかくし、にわかにいとまごいを告げると、庄蔵は呆然の体であった。死して別れるもおなじ道なれば、お互いねんごろに離情をのべ、抱き合い、口を吸いあつたのち、光太夫はいちもくさんに駆けだした。そのとき庄蔵は子供のよう
に声をあげて泣き叫んだ。

「庄蔵は叶はぬ足にて立あがり、こけまろび、大声をあげ、小児の如くなきさけび、悶へこがれける。道のほど暫のうちはその声耳にのこりて、腸を断計におぼえける」(『北槎聞略』卷之三)。

のち、庄蔵は同胞に看取られながら、ひとり寂しく逝った。その没年、享年ともに明らかでない。

一八〇五年(文化二年)、日本語学校は「イルクーツク中学校」に合併され、一八一〇年(文化七年)には新蔵が亡くなったので、主として助手キセリヨフ(オホーツクからイルクーツクに送られて来た帰化漂流民、不詳)が日本語を教えることになった。

ロシア政府から、「日本語学校」の閉鎖を命じられたシベリア総督兼枢密顧問官フォン・ペステルは、一八一六年(文化十三年)七月二十六日付で、その旨をイルクーツク知事トレスキンに令達し、この年六十年以上もつづいたイルクーツクの「日本語学校」はついに閉鎖された。

閉鎖のうきめを見た理由としていくつか考えられる。ロシア人はいわば無教養な日本漂流民から日本語をまなんだのであるが、おそらくろくな教材や教育体系もないままに学習したために、教育の実をあげることができなかったからであろう。

はなはだしい例としては、「いろは」さえ怪しい生徒がいたようだし、日本語をロシア語に正確に訳すことができる生徒は皆無にちかく、多年だらだらと学ぶだけで成果はあがらなかった。また生徒は年をとるにつれて、学習意欲がなえ、やがて日本語研究の継続を拒絶するようになり、また新入生を募集しても、応募者はなかった。そのため廃校にいたったようだ。

一七〇五年(享永二年)十月、ペテルスブルクにおいてはじまった日本語教育は、一八一六年(文化十三年)七月にイルクーツクにおいて終えんをむかえるまで約一世紀以上つづいたわけであるが、この間に日本語を教えることに半生をささげた漂流民教師はおおせいロシアの土となった。

いったいどれだけの日本人教師が亡くなったものか、実体は明らかでないが、資料からひろうとつぎのようになる。

〔氏名〕	〔没年〕	〔埋葬地〕
(ペテルスブルク)		
デンベイ(伝兵衛?)	一七三〇年以前?	?
サニマ(三右衛門?)	一七三九年以前	?
ゴンザ(権佐?)	一七三九・一二・一五	ウオズネセラヤ寺院
ソーザ(惣左?)	一七三六・九・一八	(カリンキナヤ寺)
磯治	一七五三	?
七五郎または八兵衛	一七五三	?
(ヤクーツク)		
シゲジロウ(茂治郎?)	一七六五・八	?
市五郎	一七九四・九	?
(イルクーツク)		
洗礼名・スウィニイン	一七六三・一	エルサレム墓地(現・「中央公園」、当時 はイルクーツクで唯一の墓地)
吉郎治	一七九九・一	〃
伊兵衛	〃	〃
久太郎	〃	〃
洗礼名・パーノフ		
洗礼名・チョールヌイ		

新蔵	洗礼名・ニコライ・コロツイギン	一八一〇	〃
庄蔵	洗礼名・ヒョードル・シトニコフ	?	〃
巳之助		?	〃
松本村九平		?	〃

*

天明二年壬寅(一七八二)十二月十三日、伊勢の国(三重県)の白子村百姓彦兵衛の持船「神昌丸」(千石積み)は、紀州藩の回米・御瓦・木綿・葉種・紙・膳碗その他の品々を積みこみ、白子の港を出帆し、江戸にむかった。

同船の乗組員(十七名)の出身地および氏名は、つぎのとおりである。

〔出身地〕	〔役目〕	〔氏名〕	
伊勢国若松村	船頭	光太夫〔四十二歳〕	(帰国)
〃	船親父〔船中諸式賄方〕	三五郎	アムチトカ島で病死
〃	水主	磯吉	(帰国)
〃	〃	九右衛門	
〃	〃	清七	アムチトカ島で病死
〃	〃	九右衛門	イルクーツクで病死
〃	〃	幾八	船中で病死
〃	〃	藤吉〔藤蔵〕	カムチャッカで病死
〃	〃	庄蔵	帰化

伊勢国桑名村	船表賄方「帆の上下舵 <small>かじ</small> を司る」	新蔵	婦化
紀伊国稲生村	上乘「水夫頭」	次郎兵衛	アムチトカ島で病死
伊豆国「静岡県」小浦	水主	作次郎	〃
志摩国「三重県」小浜村	〃	安五郎	〃
〃	〃	長次郎	〃
伊勢国若松村	荷物賄方	勘太郎	カムチャッカで病死
〃	飯炊き	小市	(帰国)のち根室で病死
		興惣松	カムチャッカで病死

船は同日の夜半ちかく駿河の沖にさしかかったが、このとき急に北風が吹きおこり、西風と互にもみ合うようになり、舵がへし折れてしまった。波浪はますます高くなり、明け方になると、帆柱を切り倒さねばならなくなった。

こうして神昌丸は、渺渺たる大海をただ風浪に身をまかせ、ただようしかなかった。翌天明三年(一七八三)七月、船はアリュージャン(アレウト)列島の一小島アムチトカに漂着した。光太夫はこの小島で約四カ年すごし、その間に皮類(ラッコ、アザラシなど)の交易のために当地に来ていたロシア人ヤコフ・イワーノウィチ・ニビジーモフに救われ、生き残った九名は、天明七年(一七八七)七月カムチャッカをさしてアムチトカ島を出帆した。

そして同年八月カムチャッカ中東部の——ウスティ・カムチャッカ *Ust-Kamchaisk* に到着した。当時、ここは獵師たちのテント小屋がいくつも見られるだけの寒村であった。やがて光太夫らは、ニジニイ・カムチャッカ(政庁所在地、「聖ペテルと聖ポール」のこ)から来た郡官オルレヤンコフから取調をうけたのち、ニジニイ・カムチャッカ(戸数、八、九十ほどの町)に連れてゆかれ、手厚くもてなされた。

天明八年(一七八八)六月、光太夫ら六名(九名ちゅう三名は死亡)はオルレヤンコフ少佐の部下ホケーウィチ大尉とその兵卒二名、および十五名のロシア人らとニジニイ・カムチャッカを発足し、チギル *Tighil* (オホーツク海に面する戸数、百四、五十の小さな町)

にむかった。

途中、川をさかのぼったのち上陸し、山路を越え、ふたたび川船にのると川をくだり、七月チギルに到着した。光大夫の一行はここで一ヵ月ほど滞在したのち、同年八月チギルを出帆し、対岸のオホーツク *Oholotsk* (戸数二百ほどの港町) にむかい、九月上旬に着。オホーツクの町は、砂州から成る小さな島のうえにあった。

光大夫らはこの町で十二日間滞在し、この間にシベリア横断に必要な品々をととのえた。かれらは郡官コーフより路銀として銀貨(光大夫は三十枚、他のものは二十五枚)を与えられ、その金で皮の衣服・帽子・手袋・靴などを求め、九月中旬オホーツクを出発した。

一行は無人の荒野と原始林のなかを馬に乗って進んだが、手足がひえると馬をおりて歩き、ふたたび馬にのった。雪の夜は、木の枝を敷き、その上に毛布を延べて寝るのだが、寒くてとても安眠できなかった。

十一月上旬、極北多寒の地——ヤクーツク(戸数、五、六百ほど)に着いた。当地はシベリアでも最も寒いところとされ、あまりの寒さに身が震えあがるほどであった。かれらはミルクのような濃霧の中で約一ヵ月暮らさねばならなかった。

光大夫らはこの町で、長官よりそれぞれ路銀をもらうと、十二月中旬、そりに分乗してつぎの目的地イルクーツクにむけて出発し、翌寛政元年(一七八九)二月上旬、無事イルクーツク *Irkutsk* (戸数三千余)の町に到着した。

イルクーツクは、北緯五十二度十七分、東経百一度五十五分に位置し、イルクート川とアンガラ川との合流点にある。この町は一六五二年コサツクの隊長イワン・パシャポフ⁽⁹³⁾という者がアンガラ川を発見し、その後この川とイルクート川の合流点にあるディアチ島に防舎(小要塞)をつくり、毛皮貿易のための市場を開いたのを起源⁽⁹⁴⁾としている。一七九一年十一月の時点で、戸数約三千五百、人口は約九千五百であった。

官庁、商店、民家の多くは木造造りであり、総督府の建物だけがひとときわ大きく、宮殿のようであった。町には教会が八つ、修道院が二つあったが、十九世紀のはじめ教会は十四を数えるまでになった。

十九世紀の初頭にイルクーツクを訪れたG・H・フォン・ラングスドルフ(ロシアの宮廷顧問官)は、この町をつぎのように描いて

イルクーツクから約八露里の地点にある、なだらかな高台の上から、わたしはもっともすばらしい眺望を楽しんだ。イルクーツクの町をかかえているアンガラの谷が、眼下に広がっていた。町中にあるたくさんの石造りの教会は、光りかがやく頂塔や鐘楼が付いており、富と繁栄を物語っているような心地よい印象をあたえた。

しかし、正直なところ、町に近づくにつれて、こういった印象を捨てねばならなかった。無数にある木造の粗末な小屋ときわだった対照をなしていたし、そういった豪華な建物とあばら屋とがまじり合っていたからである。

光太夫たちが当地を訪れて九十年後の一八七九年（明治十二）七月七日、町は大火によって二分の一がなめ尽され、三千六百の家屋、教会を十、市場を四つ消失した。

光太夫たちがこの町にやって来たとき、右岸地区だけが小さな街をつくっており、町の四方はほとんど樹木でおおわれ、アンガラ川は固く凍結し、毎日のように雪がふったかとおもわれる。しかし、春になると、氷は解け、川の水が流れだし、白樺が芽を吹きだし、ポプラの白い種子が飛び舞った。

光太夫たちは、ヤクト街道を通って、イルクーツクの町の中に入ると、ウシャコフカ地区にむかった。この地区に住むウォルコフという馬蹄をつくる鍛冶屋の家にひとまず投宿し、のち航海学校内に付設されている日本語学校に寄寓した。

やがて光太夫ら六名の日本人は、シベリア政庁より生活費として一日銅錢十枚を支給されたが、のちその支給は停止された。生活費にさしさわりが生ずると暮らしてゆけないので、懇意になった富裕な商人たちの家をあちこち訪ねては、飯をたべさせてもらった（『北槎聞略』卷之三）。

そもそも光太夫たちがカムチャッカに護送され、さらにイルクーツクまで送られて来たのは、シベリア総督の命によるものであり、かれは政府の意を体して、日本人たちをこの地に引き留め、役人（日本語教師）または商人になるように勧め、日本との通商関係樹立

の端緒を開く腹積もりであった。

当時、閉鎖同然のイルクーツクの日本語学校の生徒として、つぎの三名がいた。このうちの二名は、奥州南部佐井村の竹内徳兵衛ら十六名の漂流者のなかで、ロシアに帰化した日本人とロシア婦人との間にできた子供であり、もう一人は生粋のロシア人であった。

イワン・フィリツポウイチ・トラベズニコフ……漂民・久太郎（久助）の子。

アンドレイ・タターリノフ……漂民・三之助の子。日本名を「さんばち」といった。

エゴール・イワノウイチ・トゥゴルコフ……久太郎の弟子。のち遣日使節アダム・ラックスマン中尉の通訳として蝦夷にきた。

後者のトゥゴルコフの日本語の学力は、はなはだ心もとなかった。かれは光太夫らがイルクーツクに来たとき、通訳をつとめ、シベリア総督の内命をうけて、漂流民たちを同地にとどまるよう慰留したと考えられている。

光太夫らは、カムチャツカのチギルからオホーツクにむかったとき、船中でホケーウイチ大尉と知り合い、同人の紹介でイルクーツクに住むエリク・ラックスマンと懇意になった。ラックスマンは、光太夫たちのために帰国の願書を何度も起草し、それをシベリア総督に申請してくれた。

けれど帰国許可の請願は、そのつど却下された。ラックスマンは、さいごの手段として、皇帝にじかに嘆願するしかないと考え、光太夫ら連れて露都ペテルスブルクにむかう準備にとりかかった。

寛政三年（一七九一）一月中旬、光太夫は新蔵、庄蔵、小市、磯吉の四人をイルクーツクに残し、ラックスマンとその次男（アフアナーシイ）および従僕ら五名は、雪のなかを馬八頭にひかせたそりに乗ってペテルスブルクを目ざして、イルクーツクをあとした。かれらはかちかちに凍った雪の道を昼夜兼行でひた走った。かれらはトムスクートボリスクエカテリンブルクカザンニジニ・ノフゴロドモスクワなどに寄り、同年二月中旬すぎ、約一ヵ月後にペテルスブルクに到着した。

光太夫は帰国の請願にたいする返事を一日千秋のおもいで待ったが、何の音沙汰もなかった。やがて商務大臣ウォロンツォフ伯から、ラックスマンのもとに、五月二十八日光太夫をともなつて参内するよう達しが届いた。そしてこの日、ツァールスコエ・セロ（ペテルスブルクの南南東二六キロ）にある夏の離宮において、エカテリナ二世の謁見をうけた（『北樺聞略』巻之三）。

同年九月、光太夫のもとにウォロンツォフ伯から呼び出しがあり、その邸宅を訪ねると、帰国を許可する旨を正式に伝えられた。そして入京して十ヵ月後の同年十一月、光太夫とラックスマンとその従者、あとからペテルスブルクにやって来た新蔵ら計六名は、ペテルスブルクを出立し、来た道をひきかえし、一月二十三日の夜半、約一年ぶりにイルクーツクにもどった。

一月二十四日、光太夫らは総督府に出頭すると、帰着を報告した。総督ピーリは旅の労をねぎらい、酒食を出してもてなしてくれた。そのとき総督は、送還船の準備がととのう五月ごろまでイルクーツクで待つようにいった。

やがて初夏の五月になり、同月二十日、光太夫は先発としてラックスマンおよびその三男マテリンらとともにイルクーツクを出発し、ヤクーツクにむかう船着場があるカジカ（イルクーツクの北北東六〇〇キロ、レナ川の河港があるいまのキレンスクカ）を目ざした。

イルクーツクを立つにあたって、療養中の庄蔵に今生のいとまごいを告げなければならなかったが、その別離はすでに述べたように、胸を引き裂かれるような悲痛なものであった。

帰国する磯吉と小市は、通訳として日本へおもむくトゥゴルコフ、ラックスマンの属官らとあとから出発した。磯吉は帰国後、郷里の実静和尚に語ったところによると、イルクーツクに滞在ちゅうにあるロシア人女性と親密な関係をむすんだが、相手の女性は「ワカレヲ嘆クコト腸ヲ断カ如シ彼女髪ヲ切りテ指輪ニソエテ磯吉ニ贈」ったことである。

磯吉の恋人であったのは、ラックスマンの娘「マリア」か姪の「アンナ」であったと考えられる。磯吉は傷寒（寒さあたり）にかかり、イルクーツクの宿屋で療養していたとき、看病に来てくれた女性と情を通じたものらしい。

光太夫らは、カジカに五月二十三日に着くと、そこから川船に乗りレナ川をくだり、六月十五日にヤクーツクに着いた。七月二日、光太夫ら先発隊五名は、騎馬でヤクーツクを立ち、オホーツクを目ざし荒野を進んだが、この時期のシベリアの旅は、蚊の大軍に苦しめられる、ひじょうに苦しいものであった。

一行は革の手袋をはめ、紗の被衣の付いた帽子をかぶり、扨子で蚊を払いのけながら進んだが、いちばんかわいそうでならなかったのは、蚊に刺され血をしたたらせている馬であった。このような苦難の旅は一ヵ月ちかくつづき、八月三日ついにオホーツクに到着した。五日おくれて後続の小吉、磯吉らの一行がやってきた。

日本におもむく遣日使節アダム・ラックスマン中尉（北部沿海州ギジンスクの守備隊長、エリク・ラックスマンの息子、二十八歳）の一行四十名が、エカテリナ号にのり、オホーツクを帆船したのは一七九二年（寛政四年）九月二十五日（ロシアの旧曆、光太夫によると九月十三日）のことであった。

エカテリナ号は、正南にむかって航進し、厚岸島（蝦夷本島）を経て、十月二十一日根室湾内に投錨した。当時の根室は、一寒村にすぎず、波止場を中心に葦草納屋、船小屋、アイヌ人のテントなどがある、じつに寂しい所であった。

同日の夕刻、ラックスマンは根室に上陸すると、同地在勤の松前藩吏・熊谷富太郎宅をおとずれ、来航のおもむきを伝え、松前藩主への書簡の取次ぎを依頼した。ラックスマンが本国政府からあたえられた訓令では、海路江戸まで行き、当地で漂流民を日本政府に直接引きわたすよう命じられていたが、日本側はこれには難色を示し、交渉は難行した。

光太夫ら漂流民の引き渡しまで長い時間を要し、翌寛政五年（一七九三）六月二十四日、松前において江戸から来た目付（石川将監、村上大守）らに身柄を移された。

小市は、アムチトカ島からカムチャッカに渡るころより壞血病（ビタミンCの欠乏症）に悩まされていたが、せっかく帰国できたのに、根室において四月二日の夕刻、亡くなった。享年四十六歳であった。

松前で幕吏に引き渡された光太夫と磯吉は、ひととおりの取調べを受けたのち、江戸に護送され、江戸町奉行所で糾問され、のち姪子橋門外の御厩に留めおかれた。九月十八日（陰曆）、光太夫と磯吉は、江戸城内の吹上御物見所において將軍家斉、老中松平定信らの面前で漂流談をかたり、のち田安門外、番町の「火除明地」（御薬園）の茅屋（小屋）に入ることを命じられた。

漂流民は一時金として金三十両あたえられ、また月々の生活費として、光太夫は三両、磯吉は二両支給された。両人は郷里に帰ることは許されなかったが、妻帯は許可された。葉草園内で無為にすごすよう命じられ、外国の様子について語ることは禁じられた。

しかし、はじめのうち諸方に招かれ、幕臣・学者・町人・好事家と交遊し、ロシア事情について話することもあったが、このことはお上の知るところとなり、その後は外出し、人に話をすることを禁じられた。

光太夫は翌寛政七年（一七九五）、よわい四十四歳で、親子ほども年のちがう女性（十六、七歳くらい、名は不詳）と所帯をもち、

一男一女をもうけた。長男・亀二郎（一七九七〜一八五二）は、のち町儒者となり「大黒梅陰」と称し、嘉永四年（一八五二）五月二十二日向島で五十五歳を一期に亡くなり、本郷の興安寺（現・文京区本郷一丁目）に葬られた。娘は夫に先立たれたのち尼になり「良吟」と称し、ながく両親や兄の碑を守って生涯をおえた。

光太夫は文政十一年（一八二八）四月十五日に七十八歳で没し、磯吉は天保九年（一八三八）十一月十五日に七十三歳で亡くなり、両人は本郷の興安寺に葬られた。ただし墓は現存しない。

*

寛政五年癸丑（一七九三）十一月二十七日、牡鹿郡石巻の米沢屋平之丞の持船「若宮丸」（八百石積み）は、仙台藩の回米・御用木などを積みこみ、石巻の港を出帆し、江戸にむかった。

同船の乗組員（十六名）の出身地および氏名は、つぎのようなものである。

〔出身地〕	〔役目〕	〔氏名〕	
牡鹿郡石巻	沖船頭	平兵衛	アリューシャン群島ちゅうの一小島「アンドレイ」で病死
宮城郡寒風沢浜	舵取	左太夫	帰化
〃	水主	銀三郎	帰化
〃	〃	民之助	帰化
〃	〃	津太夫	（帰国）
〃	〃	左平	（帰国）
宮城郡石浜	〃	辰蔵	帰化

牡鹿郡石巻	清蔵	帰化
〃	八三郎	帰化
〃	善六	帰化
〃	市五郎	ヤクーツクにおいて病死
〃	巳之助	帰化
〃	炊	
牡鹿郡小竹浜	茂治平	
〃	吉郎治	イルクーツクにおいて病死
桃生郡深谷室浜 <small>むろのはま</small>	儀兵衛〔儀平〕	(帰国)
〃	太十郎	(帰国)

若宮丸は、十二月上旬に時化にあい、やむなく帆柱を切りたおしたが、やがて舵も波にとられ、漂流をはじめた。翌年の六月初旬、船はアリューシャン群島ちゅうの一小島アンドレイ(註)に漂着した。一行はこの島に約十一ヵ月ほど滞留した。

のちエストラズ・イワイチ・ガラロフという名のロシア人(六十歳)とともにサンバシヨ島、アムチトカ島(光太夫らがいたところ)などに移り、寛政七年(一七九五)六月オホーツクの港に到着した。

このとき一行は、役所に引きわたされ、約二ヵ月ほど当地ですごしたのち、同年八月三組に分かれて出発し、ヤクーツクを経てイルクーツクへむかった。イルクーツクに着いたのは、翌寛政八年(一七九六)一月のことであった。以後、約八ヵ年この町に滞留した。

この間、船頭平兵衛は最初に漂着した一小島で、寛政六年(一七九四)六月八日腫氣(註)(はれもの)により死亡し、またヤクーツクにおいて、市五郎は病氣のため入院したが、寛政六年(一七九四)十月二十三日腫氣により死亡した。吉郎治はイルクーツクにおいて、寛政十一年己未(註)(一七九九)二月二十八日傷寒(註)(腸チフスの古称(註))により病死した。享年七十三歳。またイルクーツク滞在中に四名の改宗者がでた。

善六（洗礼名・バイトロ・ステパノイチ・キセロフ）

辰蔵（洗礼名・オレキサンダラ・ハナシイチコンダラトフ）

八三郎（ロシア名は未詳）

民之助（ロシア名は未詳）

享和三年癸亥（一八〇三）三月、生存者十三名は、ペテルスブルクに上府せよ、との命令に接した。これは新たに日本と通商関係を樹立するために、皇帝アレキサンドル一世の命をうけた使節ニコライ・レザーノフ（一七六四〜一八〇七）が、日本へ派遣されることになったからである。

一行には通訳として、日本語学校の教師新蔵（当時、四十六、七歳⁽¹²⁾）がつきそい、同年三月七日にイルクーツクを出発した。が、旅の途中で左太夫と清蔵の二人が発病したために、兩人はイルクーツクに引き返した。他の十一名は露都にむかったが、エカテンブルグからペリマに行く途中で、銀三郎が麻疹のような病気になるに残留した。

残った十名は、モスクワを経て、四月末についてペテルスブルクに到着した。ペテルスブルクでは、首相ニコライ・ペトローウィッチ・ロマンノフ *Nikolai Petrovitch Romanzoff* の邸宅に滞在し、五月十六日アレキサンドル一世の謁見をうけた。

謁見の前日、漂流民一同は、首相から帰国するもよし、ロシアにとどまるもよし、望みどおりにしてよい、といわれた。同行のうち津太夫、儀兵衛、左平、太十郎、茂十郎、巳之助の六名は、一言のもとに、帰国したいとのべた。しかし、皇帝から帰国の意志を改めて問われたとき、何をおもったのか、茂十郎と巳之助はロシアにとどまりたい、といった。

この突然の変節は、皇帝のきげんを損じたようである。帰国の意志をはっきり表明した四人には、その肩に手をおき、ねんごろにかれらをもてなしたが、在留希望者には手もかけず、いわんや言葉もかけなかったという。

おそらくロシア皇帝には、大勢の日本人を本国へ送還することによって、日本との通商の糸口をつかもうとする意図があったのであろう。だからロシアにとどまるというのは、かれの意向に反することであった。

ロシア皇帝が、帰国希望者だけに好意を示した表れは、帰国する四名をネヴァ河畔の対岸ヴァシレフスキー島における軽気球の実験

を見学させ、このときみずから臨席したことである。

一八〇三年六月二十日、

津太夫（六十四歳）

儀兵衛（四十三歳）

左平（四十二歳）

太十郎（三十歳）⁽¹⁰⁾

の四名は、残る六名に別れをつけ、ネヴァ川から小舟にのりクロンシュタット（フィンランド湾内、コリント島にある軍港）にむかい、軍艦「ナジェジダ」号（艦長クルウゼンシュテルン）にのり、同地を出帆した。このとき通訳の新蔵は、同艦まで見送りにきた。

枢密院議員兼侍従のニコライ・レザーノフ（一七六四〜一八〇七）は、日本に通商を求める遣日使節として、戦艦「ナジェジダ」号と「ネヴァ」号をひきい、日本にむかったが、これはロシア側にとっても空前の大航海であり、津太夫らはおかげで日本人として初めて世界を一周することになった。

両艦はクロンシュタットを出帆後、北海に出、途中デンマークのコペンハーゲン、イギリスのプリマスに寄港し、そのあとカナリア諸島のサンタ・クルス・テネリフェ、ブラジルのサンタ・カタリナに寄ったのち、南米最南端のケープ・ホーンを回航し、太平洋にでた。

その後、サンドイッチ諸島（ハワイ諸島）に寄り、ここで北米のカジヤク島にむかう「ネヴァ」号と別れた。「ナジェジダ」号だけが太平洋を北上し、一八〇四年七月三日カムチャッカ半島のアヴァチャ湾の港町ペトロパブロフスに到着した。ここで一ヵ月ほど停泊したのち、同港を出帆し、日本の東海岸を南下して同年九月二十六日長崎に到着した。クロンシュタットを出帆後、十六ヵ月目のことである。

津太夫ら四名は、ロシア人とともに「梅ヶ崎小屋」（宿舎）に半年留められるのだが、その間に太十郎が刃物を口のなかに入れて自殺を図った。

翌一八〇五年(文政三年)四月、幕府の拒絶にあつたレザノフは日本を退去することに決したので、津太夫らは日本側に引きわたされ、仙台藩の預りとなつた。かれらは、十二月二十日(陰曆)藩主伊達周宗の引見をうけ、その後大槻玄沢、志村弘強らにより、漂流から帰国までのてん末について聞き書きをとられた。

*

ロシア語学習の先達。

日本人としてはじめてロシア語を学び、それを研究したのは誰であつたのか。いうまでもなく、ロシア語を生れてはじめて耳で聞き、その文字を見た日本人は漂流民であつた。

大坂の漂流民デンベイ(伝兵衛?)は、一六九五年(元禄)の夏ごろ、カムチャッカのナナ河畔の部落で現住民とともに暮らすうちにカムチャダール語をすこし覚え、のちロシア・コサックのアトラソフ一行に救出されるに及んで、はじめてロシア語と接したのである。のちデンベイは、ロシア本土に送致され、ヤクーツク、モスクワ、ペテルスブルクと各地を転々とする間にロシア語を耳から覚え、モスクワの砲兵局において、ロシア人から直接教授法によってロシア語を教わつた。が、同人が受けた語学教育はどのようなものであつたのか、はっきりしたことはわかつていない。ともあれ、デンベイこそ日本人として最初にロシア語を学んだ第一号であろう。

ついで二番目にロシア語を学んだのは、一七一〇年(宝永七年)四月に、カムチャッカ半島のガリギル湾に漂着し、コサックによって救出された四名の日本人のうちの一人——紀州の出身のサニマである。同人もロシア本土に送致され、ヤクーツク、トボリスクなどを経てペテルスブルクに送られ、同地においてロシア語の正式な手ほどきを受けた。

三番目にロシア語を学んだのは、一七二九年(享保十四年)六月、カムチャッカ半島のロツパトカ岬とアヴァチャ湾との間の海岸に漂着した薩摩の「ワカシマル」の乗組員ゴンザ(権佐?)とソーザ(惣左?)である。両人はヤクーツク、トボリスク、モスクワを経てペテルスブルクへ送致されるのであるが、この間に当然耳に入るロシア語を多少おぼえたことであろう。

かれらはペテルスブルクに着くと、聖アレクサンドル・ネフスキー神学校、帝国学士院でロシア語を教わった。

四番目にロシア語を学んだのは、一七四五年(延享二年)にカムチャッカに漂着した奥州南部佐井村の竹内徳兵衛の一行(十三名?)である。漂流民の大半はロシア正教の洗礼をうけ帰化したから、ロシア語を学ばざるをえなかったであろう。このうちの五名は、日本語教師として、ペテルスブルクに送られ、のち三名はイルクーツクに戻ってくるのだが、ある程度の語学教育を受けたものと考えられる。

一七八三年(天明三年)の夏、アリューシャン群島の一小島アムチトカに伊勢の「神昌丸」が漂着した。船頭光太夫は日本文字に明るく、好学の士であったようだから、努めてロシア文字を覚えようとした。日本漂流民がどのようにロシア語を覚えて行ったかについて、『北槎聞略』(巻之一)は、つぎのようなエピソードを伝えている。

アムチトカ島にいたときのことである。ロシア人たちはときどき漂流人の衣服や調度品などを見て、

——エート・シトー (чёрто?)
と
いった。

光太夫らは、それを耳にしたとき、これは欲しいという意味なのか、それともよいとか悪いということなのか、あるいは汚ない、と
いつているのか、その意味がわからなかった。

磯吉は、こちらの方からいつてみたらわかることもあろうと思ひ、たまたまそばに鍋があったので、それを指さし、おうむ返しに、

——エート・シトー?

と
いつてみた。すると相手は、

——カストリューリヤ (Кастри́ля)

と
答えた。

「エート・シトー」というのは、きつと「何か?」という疑問の言葉であることがわかったので、その後、相手がいつたことばを耳
で聞いたとおりに記録した(『北槎聞略』巻之二)。

とかくするうちに、語彙や言い回しをかなり覚え、少々のごことはロシア語でいえるまてになった。

光太夫のばあい、ロシア文字三十三字を習い覚え、ロシアの字句をじっさい書いておぼえ記憶していた。

一七九四年(寛政五年)の夏、石巻の「若宮丸」がアリューシャン群島ちゅうの一小島に漂着した。漂流人はアムチトカ島、オホーツク、ヤクーツク、イルクーツク、ペテルスブルクと移動を重ねてゆくにつれ、徐々にロシア人が話す言葉を聞き覚え、それをメモしたりしているうちに、かなり用がたせる程度にまで会話ができるようになった。

押し並べて漂流人のロシア語は、人からきちんと体系的に習ったり、学校で正式に学んだものではなく、耳学問にすぎなかった。しかし、中にはデンベイやゴンザヤソーザのようにロシア人から正式に個人指導をうけた者もいる。けれどもかれらがロシア語を習った期間、またその語学力はじっさいどの程度のものであったのか明らかでない。

イルクーツクに留まった新蔵(ロシア名・ニコライ・コロツィギン)のように、日本語の学力のほうはたよりなかったが、ロシア女性を妻とし、ロシア社会で暮らすうちにならぬロシア語に熟達し、ロシア語でもって日本事情に関する小冊子を著すものも現れた。

じっさい漂流人らが耳で覚え、それを書き記したロシア語は、単語と簡単な会話表現にすぎず、その数にしてもせいぜい数百ほどにとどまる。幕府の内命をうけて、光太夫から漂流の聞き書きをとった桂川甫周(国瑞)は、『北槎聞略』を編むのだが、同書の巻の十は「言語」であり、この中に数百の単語や単文(会話文)などが収められている。それは光太夫ら漂流民が記すところの単語をあつめたものという。たとえば、つぎのような日本語の語句に対応するロシア語がカタカナで表記されている。が、いま日本の仮名で示したロシア語は省略する。

天文——天、月、風、星、雨

地理——山、地震、谷、村、城下

時令(時節)——今年、今日、明日、夜、秋

鬼神——仏、仏母(聖母)、耶穌(キリスト)、神僧、念仏

人倫——人、男、父、妻、母

身体付人事——頭上(くび)、首、鼻、口、耳

居室——屋(家)、官庁、学校、寺院、茶店

器材並び書画——書籍、画、文字、紙、庖丁

衣服——衣服、袴(ズボン)、雨衣、皮帽、手袋

飲食——食物、美酒(ウオッカ)、牛乳、塩、茶

草木——草、麦、哇呱芋(じゃがいも)、花、松

鳥獸——鳥、雁、鷺、水鳥、鷗

魚介虫——魚、鮫、貝、大口魚、蚊

金石——金、銀、鋼、鉛、銅

数量——一、二、一匁、一尺、一里

言辞——有、無、不知、請救(たすけて下され)、願まする、飯が喫たい、空腹でござる、どぶぞ酒がのみたい、御世話に成りました、

是を下され

『環海異聞』は、仙台藩の医官・蘭学者であった大槻玄沢が、儒学者・志村弘強とともに、日本人としてはじめて世界を一周して帰国した石巻の漂流民・津太夫ほか三名から、漂流のてん末やその見聞を聞き取って記録したものである。四名のもと漂流民は、ひとりとしてロシア文字を習い覚えてはいなかった。

かれらはロシア語を耳で覚えていても、目では知らなかったということである。そのため聞き違いが多いと考えられるが、『環海異聞』には、たとえばつぎのような語や会話文に対応するロシア語が採録されている。

人倫——人、女、男、通事、大工

身体——頭、耳、眼、口、鼻

居処宮室——家、坐敷、庖厨、門、寺

器材——旗、鞍、火炮、官船、車

衣服織段・飲食——衣服、風領、糸、麦酒、菓子

言辭——草、花、木、赤、主人

ありがとうございます、私に下さい、あなた元気が、酒をあがれ、今日はひえます。

光太夫はロシア漂流民中の逸材ではあったが、そのロシア語の力ほどの程度のものであったのかわからぬことが多い。かれは船頭であつたから、算筆はある程度達者だつたかとおもえる。光太夫はすぐれた才能と才知をもっていたから、異郷での暮らしの中で、臨機応変の処置をとり、かん難に耐えながら、生還をはたした一人である。かれのロシア語の多くは、耳から聞いて覚えたものが大半であつた。時に目にふれた文字を備忘録に写したりして、視覚的に覚えたものもあつたようだ。

早稲田大学中央図書館の貴重書に、「魯西垂語覚書」(和とじ、20.5 cm×13.7 cm、厚さ1.5 cm、表紙はカーキ色)といった題簽だんせんの付いた自筆稿本(六十九葉)がある。

これは黒色と朱色を用い、行書と草書でしるしたイロハ別に分類したロシア語の単語集のようなものである。まず、見返しに

Оросия	御国
ПРОСИТ	
РООЪТО	御船
ПРОСИТ	

↑
(ここに筆記体文字があるが判読できない)

といった文字がみられる。

このあと各音節の一覧が数ページつづき、そのあと、数詞(一、二、三……)、一月から十二月まで、アイウエオ、ついで「いろは」の順序で、日本語とロシア語がかかっている。たとえば、

○ い

石 カカメニ
稲妻 モーニャ
妹 ヘマニチャヌタラ
衣装 パアルカ
犬 サバカ

といった風に。

単語は一ページに十二、三箇しるされているから、千五、六百語は収録されている勘定になる。

このロシア語などは、日本語で思いついたままロシア文字を当てたものか。カタカナによるロシア語の表記は、かなり正確な印象をうける。

なお光太夫には、自筆の「露文日記」といったものがあり、江戸期の自筆本、草紙などのコレクターとして有名であった林若樹が、明治三十四年（一九〇一）ごろ上野文行堂を通じて手に入れた。が、若樹の没後、昭和十三年（一九三八）九月に他の蔵書といっしょに古書市に出された。大卒の初任給が五、六十円のころ、書誌学の川瀬一馬が竜門文庫のために百五十円の値をつけてもその日記は落札できなかったというから、いかに値段が高かったかがわかる。

川瀬一馬によると、光太夫の「露文日記」は、美濃紙版であり、表紙は青または紺色であったようで、表紙にはロシア語が書いてあったようである。また蘭学・英学史研究会の会員であった佐藤良雄（もと日本大学教授）が、東京帝国大学の院生のころ（昭和八年、十三年）、恩師（吉野作造か？）から、講義のなかで聞いた目撃談として、つぎのように記憶していた。

光太夫の露文日記は、旅のまにまに日々綴ったものではない印象を与えた。第一に筆がちがっておらず、さらに紙はいたんでいない。この二点からも漂泊の旅を感じさせない。おそらく、帰国後にまとめて書いた回顧録であった可能性が高いということである。目下、同日記の所在は明らかではない。

そういえば、「露西亜語覚書」は多少すすけた感じを与えはするが、紙のつかれをあまり感じさせない。文字も比較的きれいに書い

であるし、単語を採録し、それをイロハに分類して記さねばならなかったであろうから、ロシアをさすらっていたとき書きしるしたものでなく、帰国後、メモを整理し、あるいは思い出すままに書いたものか、それとも他人の筆になるもののかはつきりしない。

光太夫は帰国後、吹上の上覧において、ことばは覚えなかったのか、といった質問に対して、ロシア語は耳から聞いて覚えたもので、まさかのときには役立たず、何かにつけ不便を感じました、といった趣旨の答弁をしている⁽⁹⁴⁾。

『北槎聞略』（卷之十一）の「言辞」は、かならずしも光太夫のロシア語の理解度をしめすものではない。ロシア語の短文を分析した村山七郎（もと順天堂大学教授）によると、光太夫は文法的に誤りのない複雑な文章を書くことができたとは思えず、かれのロシア語はあくまで耳学問にすぎず、ロシア文字を多少よんだり、書いたりできた程度と結論されるという。

光太夫のロシア語は、心もとないものであったが、ペテルスブルク滞在中に『欽定全世界言語比較辞典』（ロシア科学アカデミー会員P・S・パラス「ドイツ人」が一七八七年に編んだもの）に収録されていた基本語二七三語の中で二十あまりが欠語になっていた⁽⁹⁵⁾で、それを埋め、また不適当なもの、少なからず混在している南部、薩摩方言を刪正し、雅馴な日本語にした。

これは同書の改訂を手がけていた、ペテルスブルクの師範学校長ヤンコーウィチが、日本人が露都に來ていることを知り、光太夫を煩わせたものである。さらに光太夫は、イルクーツクやペテルスブルクに滞在中、携行していたと考えられる『節用集』（室町・江戸時代の実用的な国語辞典）に附載されている「日本地図」をもとに、四枚ほど日本地図を描いたとされる。

また光太夫は、『女帝エカテリナ二世の勅令により刊行した『ロシア帝国国民学校用算術入門書 第一部 価格十五カペーク 一七八四年サンクトペテルブルク刊』（15.8 cm×10 cm、厚さ1.3 cm、百二ページの小型本）を日本に持ち帰った（現在、早稲田大学中央図書館蔵）。同書の見返しの右側に、「大日本伊勢国白子大黒屋光太夫」と墨書され、そのとなりにロシア文字で「ダイコクヤ・コーダイユ」と署名されている。

さらに表題紙の左側に、ロシア文字で「カメヤ・ヒョーゾ」と自署され、その右下に草書体で「勢州白子若松龜屋兵蔵」と署名している。

*

寛政より文化年間（一七九〇～一八〇〇年代）にかけて、わが国とロシアの関係は、ますます緊迫の度をふかめて行った。ロシアはカムチャツカ半島を発見してから、カラフト（サハリン）、千島群島の方面にまで蚕食するようになった。

寛政四年（一七九二）十月、蝦夷の根室に伊勢の漂流民・光太夫ほか二名らをともなって遣日使節アダム・ラックスマンが来航し、文化元年（一八〇四）九月には遣日使節ニコライ・レザーノフが、仙台・石巻の漂流民、津太夫ほか三名を連れて長崎に入港した。レザーノフはラックスマンに与えられた信牌を持参し、露帝アレクサンドルの国書の原文と邦訳、満州文に訳したもの、計三通の書簡を携帯していた。このとき長崎の蘭通詞は、ひとりとしてロシア語がわからず、レザーノフの艦の乗組員のなかにオランダ語がかなりわかる者があり、その者に書簡の主意をたずね、ようやく理解した。⁽¹⁰⁶⁾

レザーノフは翌文化二年（一八〇五）三月、日本側から通商拒否を通告され、むなしく帰国の途にたった。が、のちかれの部下のN・A・フヴォストフやG・I・ダヴィドラらが、カラフトやクシュンコタン（千島）、エトロフ島などにおいて、松前藩の番所や倉庫などを襲うといった事件を相ついで起こした。

文化三年（一八〇六）秋、幕府はロシア使節がもってきた公文書（ロシア語、満州語）の翻訳の必要を痛感した結果、長崎奉行にたいて、ロシア語をオランダ語で注釈した洋書もしくはドイツ語で解説した書籍をオランダ商館に発注し、翌文化四年（一八〇七）十二月に満州語（満州族の言語、ツングース語の一方言）の書物を唐船主たちに注文するよう、命じた。

文化五年（一八〇八）八月、イギリス軍艦「フェートン」号が突然長崎に入港し、オランダ商館員に乱暴を働くといった事件が起こったことが契機となり、英語とロシア語の二カ国語を蘭通詞にまなばせる件について、長崎奉行と幕府とのあいだで打ち合わせがおこなわれた。

山村才助（一七七〇～一八〇七、江戸後期の洋学者、土浦藩士）は、世界地理の研究者として有名であった。享和二年（一八〇二）

新井白石の「采覧異言」^(さいらんいげん)を訂正増補し、「訂正増采覧異言」としたのち、幕命により「魯西亜国志」や「魯西亜国志世紀」をオランダ語より訳述した。

才助の語学関係の著述として、「羅甸文字」や「魯西亜字」を記した一冊本があるという。それは著書というより、ラテン語やロシア文字を興味のおもむくまま書き記したものにすぎず、とくに「魯西亜字」は、大文字と小文字の筆記体、活字体でロシア語のアルファベットをかかげたものである。

杉本つとむは、これは「簡単なるロシア文字の知識であるが、ロシア文字についてこうした記述を残しているのは、一つの見識である」としている。⁽¹⁰⁸⁾

文化元年(一八〇四)九月に帰国した、ロシア漂流民・津太夫ら四人は、多少ロシア語に通じていたとされる。かれらはロシア人社会でくらしの間は、用を弁ずるほど会話もできたようだが、帰国してからは忘れっぽくなり、仙台に帰ってから、海外事情について審問をうけたとき、忘れました、ということと質問にも答えられないことがたびたびあったらしい。⁽¹⁰⁹⁾

『環海異聞』(巻之八、言語 第二十二)にみられるロシア語の単語(天文、地理、諸国地名、時令、十二の月の名、人倫、身体、居処宮室、器財、衣服織段および飲食、言辞)やみじかい日常会話文などは、編者の大槻玄沢や志村弘強らが、津太夫らから漫然と聞き書きをとり、あとで各部門にふりわけて掲げたものである。

文化六年(一八〇九)二月から九月にかけて、左記の蘭通詞たちは、英語とロシア語を兼学するよう、長崎奉行より命じられた。

大通詞見習	本木庄佐衛門
大通詞	末永甚左衛門
小通詞格	馬場為八郎
小通詞並	西吉右衛門
同末席	吉雄忠次郎
稽古通詞	馬場左十郎

小通詞並 岩瀬弥十郎

同末席 吉雄六次郎 (のち権之助)

小通詞並 中山得十郎 (のち作三郎)

” 石橋助十郎

同末席 名村茂三郎

稽古通詞 志筑竜太

” 茂土岐次郎

” 本木庄八郎⁽¹⁰⁾

洋学の揺らん地である長崎において、オランダ語、フランス語、英語などの語学書がつくられたが、ロシア語に関しては、なかなか成果が生まれなかった。近世におけるわが国のロシア語学の研究の端緒を開いたのは、ロシアから帰国した光太夫であった。

馬場佐十郎 (一七八七—一八三二、江戸後期の蘭通詞) は、天明七年長崎の蘭通詞の家に生まれ、名を貞由 (幼児のときは千之助) といい、通称は佐十郎といった。中野柳圃 (のちの志筑忠雄) についてオランダ語を修め、オランダ商館長ヤン・コック・ブロンホフからは英語をまなんだ。かれはすでに述べたように、文化六年に英語とロシア語の兼修を命じられているが、早くも前年 (文化五年「一八〇八」) の冬、幕命により江戸に招致され、光太夫について二カ年間ロシア語をまなんだとされる。

「戊辰 (文化五年) ノ冬貞由命アリ、時に彼 (光太夫) ニ就テ其臆記 (おぼえて) シ来ル所ノ魯西亜言語ヲ修得ベシト、コ、ニ於テ毎ニ貞由ガ官舎 (天文台のことか) ニ来リテコレヲ伝ルコト今ニ二年、故ニ其会余、此編中所説ヲ告グ」 (『帝爵魯西亜国誌』⁽¹¹⁾)

また光太夫からロシア語の手ほどきを受けた者に鷹見泉石 (一七八五—一八五八、江戸後期の蘭学者、下総国古河藩の家老) がいる。同人は洋学にしたしんだが、ロシア語をも学び、光太夫が将来した「露西亜字学」という習字帳を手で写したという⁽¹²⁾。

文化八年 (一八一—) 五月、天文方に蚕番和解御用の一局が設けられるに及んで、佐十郎と大槻玄沢がその訳官にえらばれた。同年六月、千島列島とオホーツク海沿岸の測量に従事していたスloop艦ディアナ号の艦長ゴロヴニンら八名は、クナシリ島の南岸におい

て、松前藩士らによって捕えられるといった事件が起こった。ゴロヴニン一行は、箱館をへて松前に護送された。文化十年（一八一三）正月、幕府は天文台の翻訳局員・足立左内と馬場佐十郎を松前に取調べのために遣わした。

両人は同年九月に松前より江戸にもどるのだが、約半年間かれらはゴロヴニンについてロシア語をまなんだ。ロシア人らは江戸からやって来たこの足立のことを「学士院会員」と呼んだ。⁽¹³⁾ 佐十郎は印刷した「オランダ・フランス辞典」をもって来たということだが、これはタシーチェフ *Tatischeff* が訂正増補した仏露辞典（一七九八年ペテルスブルク刊、二巻本）のことであろう。

佐十郎はじぶんの知らないロシア語に相当するフランス語を聞くと、持参の辞典でその語をさがしたという。かれはオランダ語の文法を知っていたので、ロシア語の進歩はひじょうに早かったということである。加えて記憶力がきわめてすぐれていた。

そのためゴロヴニンは、記憶だけをたよりに足立のために、四ヵ月ほどかかってロシア語の文法書を書いてやった。佐十郎は大よろこびでゴロヴニンの文法を記したノートを日本語に翻訳し、ほどなく松前において脱稿した。

佐十郎が訳したこの文法書は「魯語 文法規範」と題するもので、いま静嘉堂文庫に稿本として五冊收藏されている。同書はすべて横書きであり、大きさは一定しないが、たて約18 cmよこ約13 cmの小型本である。一巻から六巻まであったが、どういうわけか五巻目は欠本となっている。

その第一巻の第一ページに「附言」があり、「此編ハ曾テ左老尹著述セル彼文法（ロシア文法——引用者）ノ規則ヲ書記スル者也……」とある。

佐十郎はオランダ語の素養がじゅうぶんにできており、またロシア語の下地があったとはいえ、仏露の対訳辞書によりロシア語をまなぶのであるから、ずいぶん手間のかかる学習であった。その苦勞がしのばれる。そして難解とおもえる箇所に行きあたると、頭をかしげ、

——ムズカシ・コトバ、ハナハダ・ムズカシ・コトバ⁽¹⁴⁾
 というのが口ぐせであった。

また佐十郎が行ったもう一つのロシア語の勉強は、漂流民・良左衛門がロシア人医師からもらった小冊子『種痘接種』（ペテルスブ

ルク刊)を日本語に訳し、「遁花秘訣」といった表題をつけた。また左内は、幸太夫がロシアから持ち帰った『女帝エカテリナ二世の勅令により刊行せられたるロシア帝国国民学校用算術入門』(一七八四年)をロシア語から日本語に訳しはじめたし、リプス物理学(二巻本)にある、各項目についてすこしでも知識を得ようとした。⁽¹⁶⁾

そのころ、足立や馬場といった官職にあった者だけが、ロシア語の素養があったのではない。じつは庶民の中にもロシア語に多少通じた者がすくなく見出され、ゴロヴニンの賛嘆をえた。

当時、ロシア人との交渉に当たっていたのは、上原熊次郎 *Wehura Kumudashero* ⁽¹⁷⁾ という五十歳代の男で、クリル(アイヌ)語の通訳であった。しかし、その学力はじゅうぶんに用が足せるものではなかった。⁽¹⁸⁾ この者と医師の東江とが毎日のように牢屋(木造の納屋のようなもの)にやって来ると、ロシア人にさまざまな器械をみせて、ロシア語の名称をたずねたりし、辞書のようなものを作った。

まずロシア語の単語の発音をたずねると、そのことばの上に日本語(カタカナ)で発音をしるし、ついで単語の意味について質問した。クリル語がわかる医務員アレクセイを通じて、手まねを使い、何かのことばを説明してやると、「おー おー」といった。一語を三十分以上もかけて説明してやると、相手は理解したらしく、話をやめる。けれど何ひとつわかっていなかった。

熊次郎の頭をもっとも悩ましたものは、名詞の前におく前置詞であった。ゴロヴニンの熊次郎評はなかなか手きびしく、天性の愚鈍といい、西洋の文法に何の理解もないばかりか、世界中のいかなる文法をわからぬ人間だと述べている。⁽¹⁹⁾ ともあれ、熊次郎は通訳としてあまり使い物にならなかったようだ。

クシュンコタン島の番人役でいまは人足の源七(越後国宮川村出身、三十六歳)と福松(津軽青森出身、四十六歳)という者がいたが、この二人は文化三年(一八〇六)九月、フヴォストフらに捕えられたのち、カムチャッカに連行され、翌年利尻島で釈放された。ロシア語はこの間に覚えたものようだが、じっさい、通訳がつとまるほどの力はなかった。あるとき松前奉行が源七をしてロシア人に「父親」の名をたずねさせようとしたが、かれは「父親」(*отец*)⁽²⁰⁾ というありきたりの語を知らず、じぶんが作った語彙集をふところから出し、あちこち捜したあげく、

——その言葉は存じませず、手帖にも見当りませぬ。⁽²⁰⁾

と白状し、満座のなかで恥をかき、通訳の席から追い払われた。

つぎに登場するのは、ロシア語の学習において異常な能力を発揮した村上貞助（北方探険家・村上島之丞の養子）という、当時二十五歳の青年である。ゴロヴニンのもとに、この初学者をつれてきたのは熊次郎であり、お奉行の思召しでこの者にロシア語をおしえ、翻訳ができるようにしてもらいたい、といった。

貞助はロシア語の単語を熊次郎から教わり、それをたくさん暗記していたが、どれも発音がまちがっていた。これは師匠の発音がめちゃくちゃであったからである。ともあれ、貞助はゴロヴニンからロシア語を教えてやる、といった承諾をえると、ロシアに行ったことがある日本人（漂流民）がつくった古い辞書とかお上に提出したロシア見聞記などが入った函はこをもってきた。

貞助は語学の才能にめぐまれていたようで、ゴロヴニンによると、ロシア語学習の第一日から珍しい才能をしめした。すばらしい記憶力を持ち、ロシア語をやすやすと発音したから、以前にロシア語を学んだことがあるのではないかと思われた。⁽¹²⁾ 師匠の熊次郎から教わった発音がまちがっていることに気づくと、語彙集に検討をくわえ、正しいロシア風の発音を日本文字で記号をつけて行った。

貞助はロシア文字の読法を覚えると、ロシア人の口から出た言葉をじぶんの手帳にアルファベット順に書き込んでいった。熊次郎が二週間かかっても覚えきれないところを、わずか一日で覚えてしまった。かれはロシア人が本国やヨーロッパ各国の事情を説明するのを聞くと、それを日本語で書きとめ、またそのとき聞いたロシア語に自説をつけて辞引に書き込んだ。⁽¹³⁾

ロシア人の観るところ、日本人はきわめて好奇心が旺盛であり、ゴロヴニンたちはたびたび質問攻めにあい、悩まされた。とくにロシア語に関していえば、日本人はロシア人から物の名称を聞くと、それをすぐ書きとめ、それぞれ自分用の小辞典をつくっていたとい⁽¹⁴⁾う。

また役人の一人で、遣日使節ラクスマンが来航したとき、ロシア語辞典の編さんに使われたという七十歳くらいの老人がいた。かれはロシア人がいる前で、日本文字をいっぱい書き込んだ大きな紙をひろげると、語尾を引きのばして音読しはじめた。

どうも本人はロシア語を読んでいるつもりだった。が、はじめのうち何のことかさっぱりわからなかった。この老人は、ゴロヴニンの事件をロシア語に訳していつているらしかった。それでも、ところどころ単語がわかってもらえたようで、それは

ロシアノ

カラブリ(軍艦)

ワーシユ・ゴスタリヤ(貴国の国王)

フヴォストフ(フヴォストフ)

アゴーニ(砲火)

カラフタ(サハリン)

といったロシア語であつた。⁽¹²⁾

そばにいたゴロヴニンらは、文章のところどころしか分からない、というと、その場にいた日本人は腹をかかえて笑つた。すると老人もそれにつられて大口をあけて笑つた。

長崎の蘭通詞のなかでも中山得十郎(のち作三郎)は、ロシア語をよくした一人らしい。かれは文化元年(一八〇四)九月、ロシア漂流民四名をともなつた遣日使節レザノフの一行が長崎に来航したとき、日露の交渉にあたり、「魯西亞滞船日記」を残したが、そのおわりにカタカナがきのロシア語をしるしたとされる。⁽¹³⁾

*

幕末になると、諸藩において洋学が盛んになるのだが、仙台藩は、文化元年(一八〇四)の仙台漂流民のロシアからの帰還、同三年のフヴォストフとその部下によるカラフト、クシュンコタン(千島)、エトロフ島における乱暴ろう藉事件、さらに文化四年(一八〇七)幕府によって蝦夷地の警備を命じられ、出兵した経験から、ロシアにたいして重大な関心を寄せていた。⁽¹⁴⁾

仙台藩の洋学機関としては、「養賢堂」における「蘭学和解方」(文政四年「一八二二」設置)をもって嚆矢とする。養賢堂の学頭・大槻平泉(一七七三〜一八四九、儒者)は、四十年の長きにわたり学頭の職にあつたのだが、洋学の必要をみとめ、文政十一年(一八

二八) 門下生の小野寺大助(のち玄適または丹元、一八〇〇〜七六)を長崎に遊学させた。^(註)

丹元は長崎滞在ちゅう、皓台寺に起居し、蘭通詞中山得十郎(作三郎)についてオランダ語をまなび、同語によってロシア語をも研究した。嘉永二年(一八四九)九月、同藩の儒者国分平蔵をともない再度長崎におもむき、翌年の四月下旬に帰国した。このとき養賢堂の洋学科のために、オランダ語やロシア語の書物をもとめた。

嘉永三年(一八五〇)四月、「蘭学和解方」に「魯西亜学和解方」が併置されたので、丹元はロシア語の教師となった。安政三年(一八五六)丹元は蘭学局総裁に進み、さらに安政六年(一八五九)四月、幕命により蕃書調所教授手伝役に任じられたが、数年後に辞職したようだ。^(註)

丹元は明治六年(一八七三)ふたたび上京し、同九年(一八七六)一月よわい七十七歳で東京において没した。生前の業績としては、「魯西亜国字」(ロシア文字を記した一枚刷、天保五年「一八三四」刊)、「救世一方」(パスト論の訳述、安政三年「一八五六」刊)、「新訳外国形勢略乗」(地理書の訳述、未詳)などのほか、オランダ語の師中山作三郎と共訳した「魯西亜国史」がある。

仙台藩が購求したロシア語書籍のうち、現存するものは、十点ほどである。が、この中にはロシア史、物理、幾何、造船、航海測量などに関するものが含まれている。注目すべきは、丹元旧蔵のタシーチェフの仏露辞典(一七九八年ペテルスブルク刊、二巻本)である。

これらのロシア語書籍は、いま宮城県立図書館に貴重書として架蔵されているが、つぎにその書名を掲げてみよう。

Вальронд, П.: Курс навигации для воспитанников Морского Кадетского Корпуса. [п. р.] Литография В. Прохороец, 1861. [47 см × 22.5 см / 厚み 2.7 см 一三三頁]

P・ヴァリロンド編『海軍幼年学校生徒のための航海教程』B・プロホロエフによる石版画入り、一八六一年刊。

これははぎらがみに印刷したような本であり、本の状態はわるい。

Веселого, Ф.: Начальная геометрия. Санктпетербург, Типография Морского Кадетского Корпуса, 1853.
[218 ㎜×145 ㎜、厚み約2 ㎜ 一六四頁]

S・スセラヨ少佐編『初等幾可学』一八五三年刊。ペテルスブルクの海軍兵学校で刷る。

同書も状態わるく、表紙の背がいたんでいる。水をかぶったようなしみが各所にみられる。

Зелекой, С.: Астрономическая средства кораблевождения. Санктпетербург, Типография Морского Кадетского Корпуса, 1861. [215 ㎜×145 ㎜、厚み28 ㎜ 六一〇頁]

S・ゼレノイ編『航海用の天文学』一八六一年刊。ペテルスブルクの海軍兵学校で刷る。

同書は、背の上と下の部分にすこし損傷があるが、この点をのぞくと、本の状態は良好である。

Зеленой, А.: Арифметика. 3. изд. Санктпетербург, Типография Морского Кадетского Корпуса, 1858.
[235 ㎜×15 ㎜、厚み2 ㎜ 三五四頁]

A・ゼレノイ編『算術書』一八五八年刊。

同書の表紙はすでになく、状態はひじょうに悪い。

Пика, Д.: Изложение : основных начал корабельной архитектуры, с практическим их применением К. Ко-раблестроенного. Часть 2. Санктпетербург, Типография Морского Министерства, 1860. [237 ㊦ × 155 ㊦ 厚 22 ㊦ 一五四頁]

学士院会員 D・ペーカ編『物理学入門』一八六〇年刊。第二部。ベテルスブルクの帝国科学アカデミーで刷る。

同書は、背のうえに少し損傷があるが、他は良好である。

Посвет, К.: Вооружение военных судов. 2. изд. Санктпетербург, Типография Морского Кадетского Ко-рпуса, 1857. [245 ㊦ × 16 ㊦ 厚 27 ㊦ 四四六頁]

K・ポスベット大尉編『軍艦の装備』一八五七年刊。第二版。ベテルスブルクの海軍兵学校で刷る。

同書は、背と表紙が取れており、損傷がひどい。

Штатное положение, припасам и материалам, отпускаем В Настоящее вооружение на военные парусныйяс уда. Николаев, Черноморского Гидрографического Депо, 1840. [44 ㊦ × 29 ㊦ 厚 27 ㊦ 五十七頁]

『乗組員の状態、糧食と船の帆走用装具に用いられている資材。ニコラーエフ、黒海水路事件』一八四〇年刊。

同書は大版であり、背のうえに損傷があり、また表紙は取れており、状態はひどく悪い。

Устрялоб, Н.: Русская Историческим обозрением Царствования государя Императора Николая I. 5. изд. Часть 1. Санктпетербург, Типография Аполлона Фридрихсона, 1855. Сонг. Часть 1: Древняя история. [24 冊 × 16 冊、厚さ約 3 冊、四四六頁]

N・ウエミニャーナロウマ著『ロシア史—ニコライ一世陛下の御世の史的な記録』一八五五年刊。訂正、増補の第五版。第一部—古代史。ペテルスブルクのアポロナ・フリドリクソンナ社刊。

同書の状態はよい。巻尾に地図が数葉ついている。

Пика, Д.: Изложение основных начал корабельной архитектуры, с практическим их применением К Кипто графия Морского Министерства, 1860.

Сонг. — Часть 2: Руководство К Практик кораблес троения. [20 冊 × 13 冊、厚さ 1.5 冊、一八八頁]

D・ビイカ著『造船にじっさい応用する、造船術の基礎的かつざん新な解説書』一八六〇年刊。第二部—「造船のじっさいについての入門書」
A・ルディコヴとX・プロロロヴァが訂正した第二版より訳す。ペテルスブルクの海軍省において刷る。

同書の状態はわるく、表紙も半分ほど欠落している。

Татищевым, И: Полный Французской и Русской лексиконь, съ Последняго издания лексикона Французской переведенныи = Dictionaire complet françois et russe, composé sur la dernière édition de celui de l'Académie françoise. 2. изд. Том. 1-2. Санктпегербургу, Императорской Типографии, 1798. [22.7 cm × 14.5 cm / 厚さ 7.8 cm / 一巻は九五七頁 二巻は八二八頁]

フランス・アカデミーの最新刊にもとづいて編んだ『仏露辞典』第二版。政府顧問であるJ・ドゥ・タシーチェフ氏が、訂正増補されたフランス語の元版を入念に突き合わせたもの。一七九八年ペテルスブルクの帝国印刷局のJ・J・バイトブレヒト社から刊行。

タシーチェフの「仏露辞典」(第二版)は、国内に何点か現存する。かつてゴロヴニンが千島列島の国後に上陸したとき、同書を携えており、旧幕府の蔵書のなかにも同辞典の第二巻があり、いま静岡県立図書館(葵文庫)に収蔵されている。なお一橋大学附属図書館には第一巻(こげ茶色の皮装、「東京商業図書」とある)のみがある。上巻、下巻ともにそろっているのは、宮城県立図書館だけである。

江戸後期の蘭学者・宇田川榕庵(一七九八〜一八四六)は、オランダ語のほかラテン語、英語、ドイツ語、ロシア語などもかじったが、早稲田大学中央図書館に、

「魯西亜字音考」(28.6 cm × 17 cm、厚さ0.2 cm)
といった、自筆稿本(貴重本)が架蔵されている。

この稿本の表紙の色は、黄褐色であり、題簽には「:文字」とあるだけで、書名はほとんど消えてしまっている。

青色の野線が引かれた用箋には、「開物全書」の文字がみられる。漢語の「開物」とは、人がまだ知らない所を開いてやる意と解せられる。が、榕庵はいつごろこの稿本を執筆したのか明らかでない。おそらく、文化・文政から天保年間(一八二〇年〜三〇年代)のことではなからうか。

わずか数ミリの厚さしかないこの稿本は、六葉から成り、ところどころ虫くいがみられる。中味についていえば、巻頭（一枚目）に「魯西亜音考 三十三文字」がみられ、ロシア語のアルファベットの大文字——АБВГДЕЖЗИЙКЛМНОПРСТУФХЦЧШЩЪЫЬЭЮЯ——がきれいな文字で記してあり、それにはカタカナで発音がついている。（榕庵の発音には誤りがあり、正しくはア、ベ、ヴェ、ゲーとすべきもの）。

このあと（三枚目）「伊呂波填字」がくる。填字とは、文字で書いて空白をうめる意である。

——い、ろ、po、は、xa、に、Hi、ほ、xo…

興味をひくのは、三枚目から五枚目にかけての欄外に、
Хакодже, Теке, nakamū, daikok, Myapakama, Шпоро,
Коолаво, Ice

といったロシア文字と漢字がみられることである。

そしてないじのページには、

ニホンメム

タチワカレ イナバノヤマノ

三子ニ

といった文字をロシア語で表記し、そのあとつぎに引くようなロシア文字が書いてある。

大光蔵錢銘

СИБИРСКАЯ. МОШЕТА.

Б. М. ЕКАТЕРИНА

ДЕСЯТ. Р8Б ДЕНТА

文化二年（一八〇五）三月、レザーノフが座乗するナジェジダ号が長崎を出帆し、帰国の途についてから、嘉永六年（一八五三）七月にロシア使節プチャーチンが来航するまで、半世紀ちかくロシア船が長崎に出入りすることはなかった。この間、ロシア船がときどき日本漂流民をのせて長崎に来航することはあったが、ロシアの国情やロシア語の研究はなおざりにされていたようである。⁽¹²⁾

しかし、嘉永六年（一八五三）七月ペリーの来航につづいてロシア使節プチャーチン提督が軍艦「パルラダ」ほか三艦をひきいて長崎にやって来て、千島・サハリンの国境の画定と通商条約締結を要求するにいたり、ふたたびロシア語の研究の必要が生じた。このとき率先してロシア語をまなんだのは、

志賀浦太郎（一八四二—一九一六、稲佐の庄屋・志賀和四郎の長男）

諸岡栄之助（不詳）

であった。志賀は幼い時分からロシア人の宿舎に出入りし、そこでロシア語を覚え、プチャーチン一行ちゅうの中国語通訳ゴシケヴィッチ（のち初代箱館領事）やゴンチャロフ（ロシアの作家、プチャーチン提督の秘書）などからロシア語の指導をうけたとされる。

安政元年（一八五四）四月、志賀は再来日したプチャーチンの軍艦にのって下田におもむき、また同五年（一八五八）ロシア軍艦「アスコリド」号が長崎に来泊すると、稲佐の悟真寺に滞在を許可された乗組士官の取締を命じられ、士官ムハノフについて西洋事情を聴き、かつロシア語を学んだ。文久元年（一八六一）九月、箱館港備付幕府用船「健順丸」乗組通弁を命じられ、同船にのり、同二年三月箱館奉行組下同心に召抱えられ、その後箱館に在勤した。

ロシアは、箱館に領事館を設置することになり、その初代領事として、ゴシケヴィッチが家族や館員をともない安政五年（一八五八）九月に着任した。ゴシケヴィッチは志賀を愛し、つねに館内に留め、かたわらロシア語を志賀をはじめ役人やその子弟に教授した。

当時、箱館にはロシア語に通じた者がいなかったため、奉行所は志賀を教師とし、同所の役人らにロシア語をまなばせた。

ゴシケヴィッチは、ロシア語に通じた通訳を養成する必要から、箱館奉行の柴田日向守や小出大和守にロシア本国に留学生を派遣することを勧め、また閣老にも進言するために、志賀や宣教師ニコライをともない江戸にむかい、要路のひとつとを説得した。幕府はついにかれの意見を容れ、ロシアへ留学生を送り出すことに決した。

大砲差図役下役並勤方寅之助^{たがれ}・同蘭学稽古人世話心得

村越只次郎組飯抱人同心・新吉次男

小沢清次郎（十三歳）

田中 次郎（十五歳）

富士見御宝蔵番格・歩兵差図役動方保太郎弟・開成所独乙学稽古人世話心得

大築彦五郎(十六歳)

開成所教授職齋宮惣領・同仏学稽古人世話心得

市川 文吉(十九歳)

洪哉弟・開成所英学稽古人世話心得

緒方城次郎(二十二歳)

箱館奉行組下同心

志賀浦太郎(二十二歳)

箱館奉行支配調役並

山内作左衛門(三十歳)

ロシア留學生の人選は、幕府の学問所(開成所)で、独・蘭・仏・英などの外国語をまなんでいた旗本や御家人のなかから選び、世話役兼取締として箱館奉行支配むきの者(山内作左衛門)を一人つけた。

ところが、志賀は突如留学を取り消された。かれはかねてペテルスブルクでロシア語を学ぶことを熱望していたが、放埒な生活を送ったあげく、大きな借金をこしらえ、また女性問題もからんだために当局の忌諱にふれ、そのため留学を取り消されたようである。

結局、山内以下五名は、慶応元年七月二十七日(一八六五・九・一六)露艦ボガテルにのり箱館を出帆し、翌慶応二年二月九日(三・二五)フランスのシェルブルール港で下船し、陸路ペテルスブルクにむかい、露都には二月十六日(四・一)に到着した。

ペテルスブルクに着いた幕生六名は、折から帰国中のゴシケヴィツ宅で四泊したのち、借家に移った。ロシア語の学習は、はじめめいめいで自習し、ときどきゴシケヴィツ、ゴンチャーフ、ほか三名の教師から語学・歴史・数学などを学んだ。が、語学の進捗はのろかったようだ。

学生取締の山内が、故国にいる家族に出した私信によると、ロシアでの暮らしが五ヵ月になると、新聞や一般書が拾いよみできるようになり、聴取の力もすこしはついたと述べている。いちばん辟易したのはロシア文法と会話であり、ここ二、三年は素読同様であるかと語っている。慶応二年の暮までにめいめい専攻科目も決まったが、専門学校や大学に入るにしても語学力は十分とはいえなかった。ロシア学についての成果が上がらぬうちに、慶応三年山内作左衛門が健康上の理由から帰国の途につき、同四年こんどは幕府崩壊にともない緒方、大築、田中、小沢ら四名が帰国した。市川文吉は帰国の道をえらばず、プチャーチン伯爵邸(キロシユナヤ十八番地)に身を寄せ、ゴンチャーフほか三人の教師からひきつづきロシア語・歴史・数学の個人指導をうけ、明治六年(一八七三)九月、約八

年ぶりに故国日本の土をふんだ。

安政の開港以来、長崎に英米露仏などの艦船がひんばんに来泊するようになると、オランダ語だけでは用をなさず、各国の言語に通じた通詞が必要になり、幕府は諸外国語の兼学を勧めた。

元治元年（一八六四）正月、長崎の大村町に「語学所」（のち「済美館」「広運館」と改称）が設けられ、英語・フランス語・ロシア語の三カ国語を教授することになり、語学の学習に熱心なものは誰でも入学できた。⁽¹³⁵⁾ ロシア語についてはいえば、同年十二月、長崎奉行服部左衛門尉（文久3・4）慶応2・8まで在任、のち勘定奉行）は、滞泊ちゅうのロシア艦の艦長（氏名不明）に書簡をおくり、貴艦の乗組員一名を教師とし、当港のオランダ、唐通詞らにロシア語を教えてほしい、と依頼した。⁽¹³⁶⁾

このとき植村作七郎、志築禎之助、鄭右十郎、頼川保三郎、林道三郎、佐藤麟太郎ら六名が、ロシア語の手ほどきを受けたものと思われる。

先の「語学所」が設立されたときのロシア語の教師名は明らかでないが、明治三年（一八七〇）当時の「広運館」の職員録に、つぎのような姓名がみられる。

魯語教導助……諸岡栄之助

魯語小句読……山本貞逸⁽¹³⁷⁾

また当時、広運館の学生は、三四九人ほどであり、英学生は二一名、フランス語学生は四八名、ロシア語学生は二二名であった。⁽¹³⁸⁾

現「東京外国語大学」の前身である「東京外国語学校」は、明治維新後に創設された唯一の官学のロシア語教育機関であり、明治六年（一八七三）の創立である。当初、同校の学科は英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、清国語の五カ国語であった。明治十八年（一八八五）には、東京商業学校（のちの高等商業学校、一橋大学）に吸収合併され、翌年一月には廃校となるが、同三十年（一八九七）高等商業学校付属外国語学校となり、同三十二年に独立し、ふたたび「東京外国語学校」として返り咲いた。

昭和十九年（一九四四）、「東京外事専門学校」と改称し、同二十四年大学となった。

創設時から明治十年代ごろまでのロシア語教員には、つぎのような人々がいる。

〔氏名〕	〔就職年月〕	〔退職年月〕
市川文吉〔東京〕	六・一二	?
柳田二郎〔東京〕	七・三(?)	?
大前退蔵〔小倉〕	?	?
トラクテンベルグ〔ドイツ〕	?	八・九(?)

などがある。

市川は幕末から明治初年まで、ペテルスブルクに約八カ年滞在し、その間にロシア語を学んだのであるが、教鞭をとった期間は一年にも満たなかった。かれは明治七年(一八七四)特命全権公使榎本武揚の通訳として渡露するからである。しかし、明治十二年(一八七九)二月、市川はロシア語の教員として復職した。

柳田二郎というのは、もとに幕府ロシア留学生の田中二郎のことであるらしい。⁽⁴⁶⁾トラクテンベルクというのは、箱館のロシア領事館からの出向であったが、だらしなく、休講が多いために解雇された。

維新後の明治五年(一八七二)は、学制が發布され、国民皆学の方針が示された年でもあるが、西洋文化摂取のために外国語を教える私塾や学校が各所に誕生した。いちばん優勢であったのは、英学塾であり、ついでドイツ語、フランス語の塾がつづいた。ロシア語学習熱は、これらの言葉に比べると見るかげもないが、明治二十年以降になると、ささやかではあるが、ロシア語学習が高まりをみせるようになる。⁽⁴⁷⁾

いま幕末から大正初期あたりまで、ロシア語を教えた官立の学校、私塾、私学校を一覧表にしてかかげると、つぎのようになる。⁽⁴⁸⁾

〔所在地〕	〔名称〕	〔創立から廃校までの年月〕
長崎	〔語学所〕(英、仏、露を教える、のち「済美館」「広運館」と改称)	元治元
函館	〔開拓使立函館学校〕(のち、「魯語学校」「松蔭学校」「元町学校」と改称)	明治四(同八)

函館	「ニコライ塾」	明治四・二〇?
仙台	仙台藩の藩校「養賢堂」の蘭学局内における「魯西亜学和解方」	万延元〓明治四
函館	「官立函館学校」(のち「官立露学校」と改称)	明治五・一〇〓?
東京	「東京外国語学校」(のち「東京外事専門学校」「東京外国語大学」と改称)	明治六・八〓?
東京	「神学校」(のち「正教神学校」「ニコライ露語学院」と改称)	明治一六〓?
東京	「女子神学校」	明治一七(?)〓?
函館	「私立函館露語学校」(のち「開有学校」と改称)	明治一九〓?
長崎	「私立露語学会」	明治二三〓?
函館	「函館露語研究会」	明治三三(?)〓?
函館	「巴 <small>とよ</small> 学校」(露語科)	明治二四〓?
東京	「露西亜語学校」	明治二四・一〓同二七・一
東京	「東邦協会付属露西亜語学校」	明治?〓同二七
東京	「露学館」(「神田成立学会」内に設立)	明治二四〓?
東京	「露西亜語学校」(「通信露学会」が設立)	明治二九〓?
函館	「北海道庁立函館商業学校」(第二外国語としてロシア語を教える)	明治三一〓?
小樽(?)	「露語研究会」	明治三三〓?
函館	「函館英語学校」(露語科を設置)	明治三五〓?
京都	「京都法政学校」(同校のなかに「私立東方語学校」を設け、中国語とロシア語を教える)	明治三六〓?
東京	「私立東洋植民学校」(英、シヤム、露、中、韓その他を教える)	明治三八(?)〓?
福井	「敦賀町立乙種商業学校」(本科においてロシア語を教える)	明治三九〓?
東京	「正則露語教授露国婦人」(M・コンデ・レンガルデンという者が設けた私塾)	明治三九〓?
函館	「露語講習会」	明治四二〓?

東京

「私立早稻田外国語学校」(英、独、仏、西、露、中国語などを教える)

大正(?) ~ ?

東京

「私立東京植民貿易語学校」(英、独、露、南洋・南米語、中国語その他を教える)

大正八(?) ~ ?

*

幕末・明治初期のロシア語学書

ロシアに漂着した邦人が、現地ですら間にロシア語を耳で聞いて記憶したり、ときにメモにとったりしたものを、帰国後役人の審問をうけたときに提出したり、あるいは見聞を口述したものを発問者が記録したのが漂流記である。その中にはロシア語彙や会話用の短文などをかなり含んでいる場合がある。

その代表的なものに、伊勢国の漂流民光太夫らの体験談を筆録した『北槎聞略』(十一巻と附録 桂川甫周撰 寛政六年「一七九四」)、仙台の漂流民津太夫らの漂流談を記録した『環海異聞』(十五巻 大槻玄沢撰 文化四年「一八〇七」)、越中富山の漂流民たちがハワイ、アラスカ、カムチャツカ、オホーツクと漂泊したときの聞書を編んだ『時規物語』(十巻 遠藤高璟編 嘉永二年「一八四九」)などがある。

日本人が編述した、初期のロシア語学書の大半は稿本や写本のままの場合がほとんどである。ロシア語関係の語学書が刊本として姿をあらわすのは幕末になってからである。いま語学書(稿本、写本をふくむ)を古い順に一覧表にしてかかげると、つぎようになる。

〔稿本〕

〔魯西亜文字集〕

(一冊)

源有著

寛政八年

内閣文庫蔵)

〔毘婆文笈〕

(一冊)

前田恭庵撰

文化八年

函館市立図書館蔵)

- 〔松岡ゴロウニ口述露語控〕 (二冊) 文化十年 函館市立図書館蔵)
- 〔魯語文法規範〕 (五冊) 馬場佐十郎訳 文化十年? 静嘉堂文庫蔵)
- 〔魯語〕 (一冊) 馬場佐十郎 文化十年 静嘉堂文庫蔵)
- 〔魯語和訳〕 (二冊) ニコライ著 小野寺魯庵・三輪魯鈍 慶応三年 個人蔵)
嵯峨善次郎訳
- 〔魯西亞文典〕 (二冊) 千葉文爾訳 明治初年 静嘉堂文庫蔵)
- 〔稿本または写本〕 成立年不詳のもの。

- 〔光太夫魯西亞語覽書〕 (一冊) 大黒屋光太夫? 早稲田大学中央図書館蔵)
- 〔魯西亞いろは〕 (二冊) 著者不詳)
- 〔羅甸文字魯西亞字〕 (二冊) 山村昌永撰 静嘉堂文庫蔵)
- 〔魯西亞寄語〕 (二冊) 桂川中良筆記 内閣文庫蔵)
- 〔魯西亞辨語〕 (二冊) 著者不詳 内閣文庫蔵)
- 〔魯西亞国字反切音訳〕 (二冊) 著者不詳 静嘉堂文庫蔵)
- 〔ヲロシヤ風道法并言葉〕 (二冊) 著者不詳 函館市立図書館蔵)
- 〔露語和訳〕 (二冊) ニコライ著(?) 小野寺魯一 三輪魯鈍 共編 函館市立図書館蔵)
嵯峨善次郎
- 〔おろすけ人言〕 (二冊) 著者不詳 北海道大学附属図書館蔵)
- 〔ヲロシヤ国方言〕 (安芸の久蔵の漂流談「魯齊亜国漂流聞書」のなかにみられるもの)
- 〔ヲロシヤノ言〕 (二冊) 督乗丸の漂民・小栗重吉著 個人蔵)
- 〔ヲロシヤノ言〕 (二冊) 同右 東京外国語大学附属図書館蔵)
- 〔魯西亞学筌〕 (二冊) 足立左内訳撰)
- 〔魯西亞辞書〕 (二冊) 足立左内撰)

〔魯齋亜語小鈔〕

(一冊) 著者不詳 東京外国語大学附属図書館蔵)

〔ロシア語辞書〕

(洋紙横綴ペン書 明治初年の写し 香川大学附属図書館蔵)

〔P-R 寿路和里〕

(一種の露和辞典、明治八年ごろ東京のニコライ塾で用いられた?)

〔刊本〕

〔蝦夷語箋〕

(一冊) 上原先生著 豊雲樓蔵版 嘉永七年刊)

〔蝦夷語箋 附録 魯西亞言語〕

(一冊) 上原熊治郎撰 安政元年刊)

〔魯西亞字箋〕

(折本一冊) 榭令輔訳 江戸・山城屋佐兵衛 安政三年刊)

〔魯西亞伊呂波〕

(奥州箱館住 常木重吉工 文久元年刊)

〔ろしゃのいろは〕

(一冊) イワン・マホワ撰 文久元年刊)

〔呂西亞單語篇〕

(長崎・晚成舎 明治四年刊)

〔露和袖珍字彙〕

(高須治輔編 渡辺至君序 東京・丸善 明治四年刊)

〔横文字いろは〕

(一冊) 著者不詳 明治五年?)

〔魯語 入門魯語柱礎〕

全]

(二冊) 大島良一訳 東京書林 明治五年)

〔魯和字典〕

(ニコライ、小野莊五郎、真岡温治編 明治五年?)

〔魯語箋〕

(二冊) 緒方惟孝著 開拓使蔵版 明治六年刊)

〔露和字彙〕

(上・下の二冊、文部省編輯局 明治二十年刊)

邦人の編述になるロシア語学書についての研究には、松村明の「幕末期ロシア語学書についての覚書」(『季刊 文学・語学』第三号)や中村喜和の「日本におけるロシア語辞典の歴史—江戸時代から一九四五年まで」(『窓』別冊『ロシア語の辞書』(昭和55・3、ナウカ株式会社)、米重文樹の「ロシア語辞典略年譜(一八七一一一九九八)」(『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』所収、平

成12・10、ナウカ株式会社) などがある。

いずれもロシア語学の専門家によるすぐれた先行研究であり、いまさら付け加えることはほとんどないが、語学書の何点かについてもうすこし補足的のべておこう。

『魯齋亜語小鈔』(写本、19 cm×26.5 cm、厚さ0.7 cm) は、三十三葉から成る。はじめに「アベウェ」三十三文字の楷書体とその草体(くずし字) が来、つぎに数量字(数詞)、鳥・風・月・鶴や方角(東西南北) をあらわすやさしい単語がくる。

ついで文化年間に、ロシアから帰国した漂流民についての記事がみられる。この写本は、東京外国語大学附属図書館に貴重本として架蔵されている。

『蝦夷語箋』(18.5 cm×10 cm、厚さ1 cm) は、何種類か異本があるようだが、早稲田大学中央図書館に貴重書として架蔵されているものは、扉に「上原先生著 蝦夷語箋 豊雲樓上梓」とあり、奥付に「嘉永七甲寅仲夏新刻 豊雲樓蔵版」とある。

「序」は付いてはいない。同書は日本語とアイヌ語との対訳式単語集ではある。が、巻頭に「天地部、人物部、肢体部、世事部」など日本語とロシア語の単語がかかぎってあり、巻尾には熟語が数ページにわたってみられる。

同書は何度か再刊されたようで、嘉永七年(安政元年)には江戸の文苑閣から、さらに明治四年には東京書林(日本橋通十軒店鈴木喜右衛門) からふたたび刊行された。

『横文字いろは』(11.3 cm×16.8 cm、厚さ0.5 cm) は、東京外国語大学附属図書館の貴重本である。表紙は仮につけたもので、奥付もない。和と同じ、木版で十二葉からなる。新庄堂梓とある。ロシア語の簡単な入門書のようなものである。

折本の「魯西亜字筌」(18.7 cm×7.5 cm) は、「例言」に「僅少ノ小冊子ト雖モ彼ノ字ヲ学フニ小補ナル可ラズ」とあるように、ロシア語の手引書(木版) である。本文のはじめに来るのはロシア語のアルファベットと日本語、オランダ語の対音であり、そのあと日本語の名詞(空、風、海など) や動詞(飲む、書く、寝るなど) が来る。そしてふたたび名詞(船、机、酒など) が来、さいごは短い会話文二行(イカ、オクラシナサル、メデタキヒヨ) でおわっている。

同書の主要部分を構成しているのは、名詞(八十七) を中心とする単語であり、縦に日本語、ロシア語、オランダ語の順で組んであ

る。ロシア語やオランダ語には、カタカナの発音がついている。奥付には「榊 令輔著 安政三丙辰五月 発行書林 江戸日
本橋通式丁目 山城屋佐兵衛」とある。

安政三年（一八五六）といえば、日露和親条約がむすばれて二年後のことであり、この年アメリカ人のハリスが駐日総領事として着
任した。

『魯語箋 全』（木版）は、ロシア語のアルファベットと名音節にはじまり、このあと数詞、季節、曜日、暦の月、方位など
が来たあと、名詞がくる。ロシア語にはすべてカタカナの発音がついている。奥付には「東京 江藤晋兵衛 佐久間羅七 書林 発兌 大島良一訳 明治

五年壬申晩夏刻成 官許」とある。

『魯語箋 上・下』（12 cm×18 cm、厚さ1.5 cm「上」、2 cm「下」）（天地、時令、人倫、身体、疾病、宮室、服飾、飲食、医薬、器用、
兵言、金石）、下巻は（鳥獸、魚介、虫、草木、果実、数量、采色、言語、依頼名詞、添詞、代名詞、動詞）などから成っている。

同書はロシアへ派遣された元幕生の緒方城治郎（惟孝）が著した唯一の著述である。「題言」によると、文明開化後、日本は外国と
の交際がさかんにになり、また朝廷は北海道への移住と開拓を勧めるに至った。北方のロシアはわが隣国であるので、その國語を通じて
かの地の風俗や人情を知り、日本の備えとすることを必要がある、という。

緒方は開拓使より命じられて同書を編んだようで、「余ニ命シテ比篇ヲ輯セシム。余嘗テ露國ニ遊ヒ其國語ヲ習ヒ略其要領ヲ得タリ。
因テ其日用ノ語ヲ集メ附スル：」（「題言」）とのべている。

はじめにロシア語のアルファベットと各音節がくる。このあと名詞などを中心とした日本語とそれに対応するロシア語の単語（三千
語以上）がくるが、ロシア語はすべて筆記体であり、カタカナの発音がつけられている。同書は、和露の語集または和露辞典と呼べ
るようなものである。

明治初期に現われた語学書は、いずれも木版であり、およそ実用に役立つものではなく、入門書にすぎなかった。辞引についてい
えば、明治二十年代から、多少は役にたつものが徐々に姿をみせるようになった。『露和字彙』（上・下、文部省編輯局、明治二十年（一
八八七）一月刊）は、活版による最初の辞典であった。

その後も大小の辞典が逐次刊行されるのであるが、持ちはこびに便利で、しかも引きやすく、実用に足る辞典があらわれるのは昭和十年代であった。

*

漂流民の耳学問によつてはじまつた日本人のロシア語学習は、蘭学者や蘭通詞たちによつて継承され、さらに維新後は来日した宣教師の塾や官立の外国語学校、私塾・私学校などで行なわれた。ロシア語はその後さらに帝国大学、私立大学、専門学校、陸海軍の学校などでも教えられ、戦後は国公立および私立大学、専門学校(学院)などで引きつづき教授され、こんにちに至っている。

注

(1) S・P・クラシエニンニコフ著『カムチャッカとクリル諸島史』(英訳) *The History of Kamtschatka and the Kurilski Islands, with the Countries Adjacent, Illustrated with Maps and Cuts*. Published at Petersburg in the Russian language, by Order of her Imperial Majesty and translated into English by James Grieve, M. D, Gloucester: Printed by R. Raikes for T. Jefferys Geographer to His Majesty, London M. DCC. LXIV [1764], p. 241

(2) 高野明『日本とロシア』(紀伊国屋書店、昭和四十六年五月)、三三三頁。

(3) カムチャッカ半島に住む原住民は、北部にコリヤーク人、南部にカムチャダール人、ラムート人、クリール人などである(『堪察加薩哈噠』(黒龍会、明治三十七年九月、非売品)を参照。

(4) S・ズナメンスキー著『ロシア人の日本発見』(北海道大学図書刊行会、昭和六十一年二月)、四四頁。

秋月俊幸訳
 アトラソフが、このとらわれ人(デンベイ)を発見したのは、イチャ川であったという記事が、G・P・シューラーの *Voyage et Découvertes faites par les Russes le long des côtes de la Mer Glaciale et sur l'Océan Oriental, tant vers le Japon que vers l'Amérique. On y a joint L'Histoire du Fleuve Amur*……Ouvrages traduits de l'Allemand de M^r. G. P. Muller, par C. G. F. Dumas

Tome 1, A Amsterdam, chez Marc-Michel Rey, MDCCCLXVI [1766] の九四頁に於て。

- (5) 注(2)の五一頁。
- (6) 注(2)の五二頁。
- (7) 前掲シューラーの九五頁。
- (8) 田保橋潔『増訂 近代日本外国關係史』(刀江書院、昭和十八年十二月)、六五頁。
- (9) F. A. Golder 著『自著 Russian Expansion on the Pacific 1641-1850, an Account of the earliest and later Expeditions made by the Russians along the Pacific coast of Asia and North America, including some related Expeditions to the Arctic regions, The Arthur H. Clark Company, Cleveland, 1914』の一〇一頁以下及び「トシキヤの地」及び「Debné」として云々。
- (10) 注(2)の三四〜三九頁。
- (11) 堀 竹雄「元禄享保間ロシアに於ける日本人」(『史学雑誌』第二十九編十二号所収)を参照。
- (12) 注(2)の四〇頁。
- (13) 注(8)の六六頁。
- (14) 注(2)の四〇頁。
- (15) J. M. Tronson, R. N: *Personal Narrative or A Voyage to Japan, Kamtschatka, Siberia, Tartary, and various parts of coast of China. In H. M. S. Barracouta*, London, Smith, Elder, & Co., 1859, p. 101
- (16) *Voyages et Découvertes faites par les Russes le long des côtes de la Mer Glaciale & sur l'Océan Oriental, tant vers le Japon que vers l'Amérique. On y a joint L'Histoire du Fleuve Amur* Ouvrages traduits de l'Allemand de M^r. G. P. Muller, par C. G. F. Dumas. Tome 1, A Amsterdam, chez Mare-Michel Rey. MDCCCLXVI [1766], p. 94
- (17) G. P. Muller 著『ロシアの北極海及びボルシャヤレーカ河記』(注) (9) の自著(公訳)の九四頁。
- (18) 注(15)の一一一頁。
- (19) オークニ著 原竹林二郎訳『カムチャツカの歴史—カムチャツカ植民政策史』(大阪屋号書店、昭和十八年四月)、九頁。
- (20) 注(2)の四〇頁。

- (21) 注(2)の四二頁。
- (22) Perry McDonough Collins: *A Voyage down the Amoor. With a Land Journey through Siberia, and incidental notices of Manchoooria, Kamschatka, and Japan*, New York, Appleton and Company, 1860, p. 338
- (23) 注(1)の二四二頁。原文はこまのようなものであせ。
- Atlasof returned from this journey to *Jakutski* the 2nd of July 1700, and brought along with him the *Japanese* he had res-cued. ...
- (24) 注(2)の五二頁。
- (25) S・ズナメンスキー著『ロシア人の日本発見』(北海道大学図書刊行会、昭和六十一年二月)、四七頁。
秋月俊幸訳
- (26) 注(15)の一一二頁。
- (27) George Alexander Lensen: *The Russian Push toward Japan—Russo—Japanese Relations*, Princeton University Press, 1959, p. 28
および注(2)の四八頁を参照。
- (28) G. A. Lensen, p. 28
- (29) ファインベルク著『ロシアと日本—その交流の歴史』(新時代社、昭和五十六年二月)、二八頁。
小川政邦訳
- (30) 注(27)の二九頁。および注(25)の四八頁を参照。
- (31) デンベイが大帝の謁見をうけた日をF・A・ゴルダーは、一七〇二年一月八日としている。同人の自著の一〇二頁の「注」をみよ。
- (32) Karl Baedeker: *Baedeker's Russia*, Karl Baedeker Publisher, Leipzig, 1914, p. 313
- (33) エリ・エス・ヘルグ著『カムチャッカ発見とペーリング探険』(龍吟社、昭和十七年十一月)、一八七—一八八頁。
小堀有米訳
- (34) 注(2)の五三頁。
- (35) 注(2)の五三頁。および平岡雅英著『日露交渉史話』(筑摩書房、昭和十九年一月)の一四五頁を参照。
- (36) 注(29)の三〇頁。
- (37) F・A・ゴルダーは、デンベイが発見されたときの様子、ロシア皇帝の謁見、ロシア語学習を命じられたこと、洗礼名などについてつぎのよう
うに記している。

Following this exploit Atlasof marched down to the Itcha river, and there he heard of a stranger held as captive, whom the natives called a Russian, but who turned out to be a ship wrecked Japanese. (p.101)

また同ページの脚注に「この有名な記事がみられる。イタリック体は、引用者による。」

Atlasof took the Japanese, whose name was *Debne*, to the Anaduir. When Peter the Great heard of *Debne* he requested that he should be brought before him at the earliest possible moment. On January 8, 1702, *Debne* was presented to the Czar, and the two had a long conversation about Japan.

Peter ordered that *Debne* should be instructed in the Russian language and that he should instruct the Russians in Japanese. In 1710 *Debne* was baptised and took the name of *Gabriel*. This *Debne* is, so far as known, the first Japanese in Russia [Russkaya Starina, Oct, Nov, 1891].

- (38) 平岡雅英『日露交渉史話』一四五〜一四六頁。
- (39) 注(8)の六七頁。
- (40) 注(29)の三一頁。
- (41) 注(1)の一四六頁。
- (42) 注(1)の二四八頁。
- (43) 注(29)の三一頁。
- (44) 注(8)の六八頁。
- (45) 注(33)の一九七頁。
- (46) 注(33)の一六四〜一六五頁。
- (47) 注(4)の二四九頁。

- (48) 注(16)におなじ。
- (49) 注(16)の一〇一頁。
- (50) 注(4)の六一頁。
- (51) G. A. Lensen, p.41
- (52) 播磨榑吉「露国に於ける日本語学校の沿革」(『歴史雑誌』第三十三編第十号所収)を参照。
- (53) 村山七郎「ロシア漂流民サニマについて」(『日本歴史』二三三二号所収)
- (54) 村山七郎『漂流民の言語』(吉川弘文館、昭和四十年四月)、二八頁。
- (55) 注(54)の二八頁。
- (56) 注(8)の六九頁。
- (57) 注(51)におなじ。
- (58) 注(33)の一九九頁。
- (59) 注(54)の二八頁。
- (60) 注(29)の三六頁。
- (61) 注(54)の二九頁。
- (62) 注(8)の六九頁。
- (63) 注(8)の七〇頁。
- (64) 注(29)の三六頁。
- (65) 注(38)の一四七頁。
- (66) 注(64)におなじ。
- (67) 注(29)の三七頁。
- (68) 注(52)を参照。
- (69) 注(68)におなじ。

- (70) 亀井高孝『光太夫の悲恋―大黒屋光太夫の研究』(吉川弘文館、昭和四十二年三月)、一三四頁。
- (71) 注(32)の一六六―一六七頁。
- (72) 注(32)の一六六頁。
- (73) 注(70)の一三二頁。
- (74) 注(29)の三七頁。
- (75) 注(70)の一三四頁。
- (76) 注(54)の三〇頁。
- (77) 注(52)を参照。
- (78) 注(70)の一六八頁。
- (79) 村山七郎編『新スラヴ・日本語辞典』(ナウカ株式会社、昭和六十年五月)、八頁。
- (80) 注(11)を参照。なお『北槎聞略』の附録にそえられている「魯齊亜国都城図」(ペテルスブルクの地図の複製、光太夫が目を通し、地名をロシア文字からカタカナにうつしたと考えられている)に「タカタリツコイスウエルコ 諸国流寓ノ者ノ寺」とあるが、これはカリンキナヤ(カリンカナ)寺院のことか。
- (81) 注(70)の一三七頁。
- (82) 注(38)の一四八頁。
- (83) 乗組員の氏名については、『江戸漂流記集 第六巻』(三六―三七頁)、『日露交渉史話』(一四九―一五二頁)、木崎良平の「竹内徳兵衛船の漂流について」(『立正大学文学部論叢』五七)を参照。
- (84) 注(38)の一四九頁。
- (85) 注(52)を参照。
- (86) 注(52)を参照。
- (87) 注(38)の一五五頁。
- (88) *Voyages and Travels in various parts of the world, during the years 1803, 1804, 1805, 1806, and 1807. By G. H. von Langsdorff.*

Aulic counsellor to his Majesty of Russia, London, 1813, Printed for Henry Colburn. 2 vols.

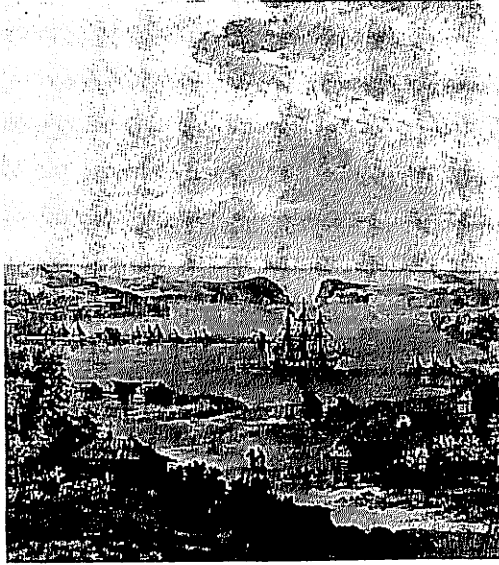
- (89) 注(52)を参照。
- (90) 注(88)の下巻、三八一頁。
- (91) 注(52)を参照。
- (92) 亀井高孝編『北槎聞略』(吉川弘文館、昭和四十年五月)、一―三頁。
- (93) Edmond Cotteau: *De Paris au Japon a travers La Sibirie voyage exécuté du 6 Mai au 7 août 1881, Paris Librairie Hachette et Cie, 1883, p. 229*
- (94) 黒田清隆『環遊日記』(明治二十年十一月)、一〇四頁。
- (95) 注(88)の下巻、三八〇頁。
- (96) 注(93)の二二四頁。
- (97) 写本「極珍書―光太夫漂流実録」。
- (98) 「北辺探事」には、「其後光太夫、磯吉は御宛行陽りて田安の臺なる植エ溜メニ措置るゝよしなり」とある。大槻茂質の写本「魯国日本交通史」(中味は北辺探事五巻をおさめたもの)を参照。
- (99) 重久篤太郎『仙台の洋学』(『日本近世英学史』増補版「抜刷」、昭和五十七年十一月、名著普及会作成)、三四八頁。
- (100) 「従文化元年九月同二年月」至「魯西亜國ヨリ日本人逆遊候一件」(『石巻の歴史 第九巻 資料編3 近世編』所収、石巻市史編さん委員会、平成二年三月)、四五〇頁。
- (101) 注(100)の四五一頁。
- (102) 注(100)の四五二頁。
- (103) 帰国の途につく四名の日本人の年齢は、史料によりまちまちであるが、ここでは『統通信全覽』に収めてある「魯国松仙臺漂民護送長崎へ渡来一件」に見られる記述にあわせた。
- (104) 「通航一覽 卷之三百十七」および桂川甫周撰「漂民御覽之記」(写本、寛政五年)を参照した。
- (105) 亀井高孝『大黒屋光太夫』(吉川弘文館、昭和六十一年二月)、一九一頁。
- (106) 「通航一覽 卷之二百七十七」。

- (107) 古賀十二郎 『徳川時代に於ける長崎の英語教育』(九州書房、昭和二十二年七月)、一〇頁。
- (108) 杉本つとむ 『江戸蘭語字の成立とその展開 Ⅱ』(早稲田大学出版部、昭和五十二年三月)、五三九頁。
- (109) 大友喜作 解説 『環海異聞』(北光書房、昭和十九年八月)、二八一頁。
- (110) 『長崎叢書 増補長崎叢史 上巻 三』(長崎市役所、大正十五年十二月)、二五二～二五三頁。
- (111) 杉本つとむ 『西洋人の日本語研究』(八坂書房、平成十一年十一月)、一六一頁。
- (112) 注(99)の六三頁。
- (113) ゴロウニン著 『日本幽因記 中』(岩波書店、昭和六十一年)、一三七頁。
- (114) ゴロウニン著 井上満訳 『日本俘虜実記 下』(講談社、昭和五十九年五月)、二〇二頁。
- (115) 注(113)の一三八頁。
- (116) 注(113)の一八八頁。
- (117) *Narrative of My Captivity in Japan, during the years 1811, 1812 & 1813; with observations on the country and the people. By Captain Colurnin, R. N. To which is added an account of Voyages to the Coasts of Japan, and of Negotiations with the Japanese. By Captain Rihard, vol 1, Printed for Henry Colburn, London, 1818, p.128*
- (118) 『通航一覽 卷之三』。
- (119) ゴロウニン著 井上満訳 『日本幽因記 上』(岩波書店、昭和六十一年十一月)、三〇五頁。
- (120) 注(119)の二七二頁。
- (121) 注(117)の二三五頁。
- (122) 注(119)の三三四～三三五頁。
- (123) 注(119)の二三三頁。
- (124) ゴロウニン著 徳力真太郎訳 『日本俘虜実記 下』(講談社、昭和五十九年五月)、一九一頁。
- (125) 古賀十二郎 『長崎洋学史 上』(長崎文献社、昭和四十一年三月)、一九五頁。
- (126) 注(99)の六四頁。

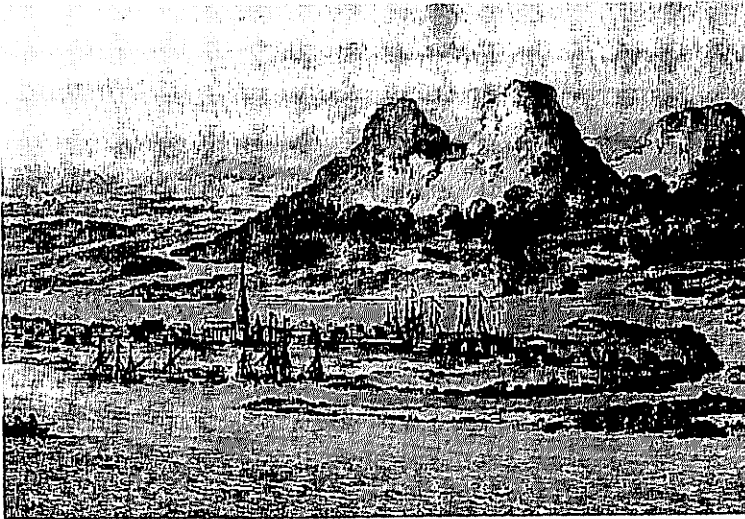
- (127) 山形敏一「養賢堂の沿革とその洋学の発達(二)」(『仙臺郷土研究』第十五卷第十号)。
- (128) 同右。
- (129) 注(125)の一九六頁。
- (130) 注(125)におなじ。
- (131) 『長崎縣人物伝』(臨川書店、昭和四十八年九月)、七三四頁。
- (132) 阿部正巳「函館駐劄露國領事ゴスケウキツチ」(『歴史地理』第三十六卷第二号)。
- (133) 「併留學事件」(外務省引継書類、28.5 cm×20 cm、厚さ2 cm、東京大学史料編纂所蔵)。
英魯
- (134) 拙稿「幕末ロシア留學生市川文吉に関する一史料」(『社会労働研究』第三十九卷第四号)。
- (135) 注(107)の六八頁。
- (136) 「技術伝習 三 長崎縣記」(外務省引継書類之内一〇五二)。
- (137) 注(107)の六九頁。
- (138) 注(107)の六九〜七〇頁。
- (139) 東京外国語学校編『東京外国語学校沿革』(昭和七年十一月)、四九〜五三頁を参照。
- (140) 日本ロシア文学会編『日本人とロシア語——ロシア語教育の歴史』(ナウカ株式会社、平成十二年十月)、四〇頁。
- (141) 『東京教育資料大系』、『都史紀要』 十七 東京の各種学校、『日本人とロシア語——ロシア語教育の歴史』、『日本とロシア』、『函館教育年表』などを参照してまとめたもの。



18世紀のカムチャッカのアヴァチャ湾と防舎（小要塞）



18世紀のカムチャッカのアヴァチャ湾の図



18世紀のオホーツクの図

S. P. Krasheninnikov:

'The History of Kamtschka and the Kurilski Islands' (1764) より

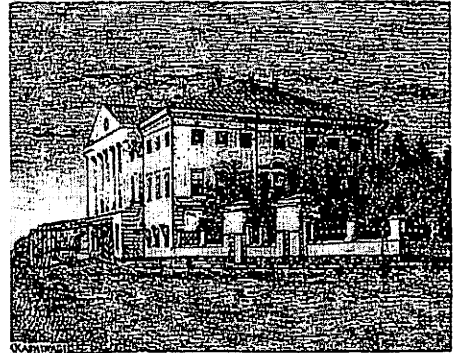


日本人漂流民らが暮らしたイルクーツクの町の全景。これは1879年（明治12）7月大火まえの図。



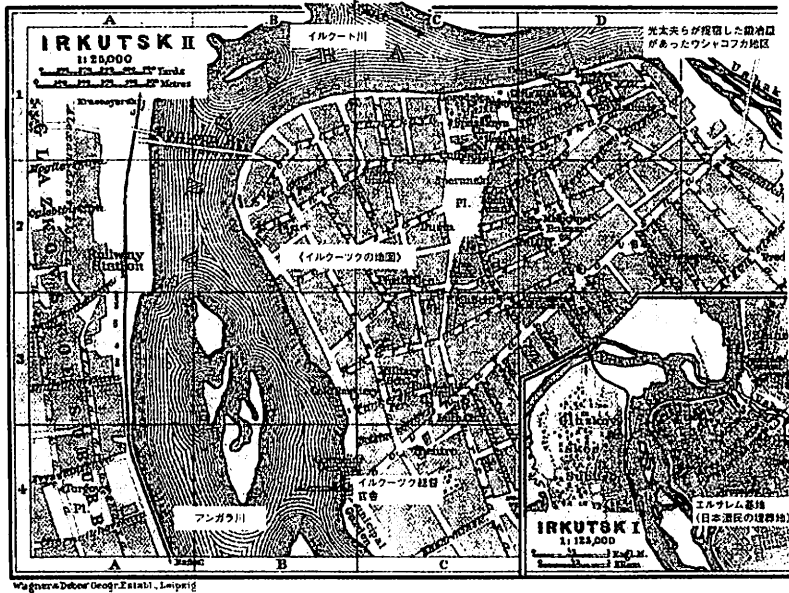
イルクーツクの町の実写写真

John. F. Fraser: 'The Real Siberia' (1902) より



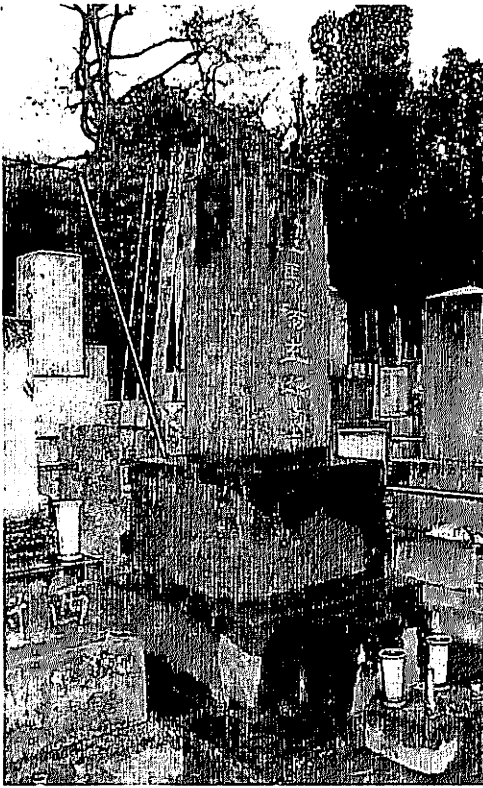
イルクーツクの総督官舎の図

黒田清隆『環遊日記』（明治20.11）より



〈イルクーツクの地図〉

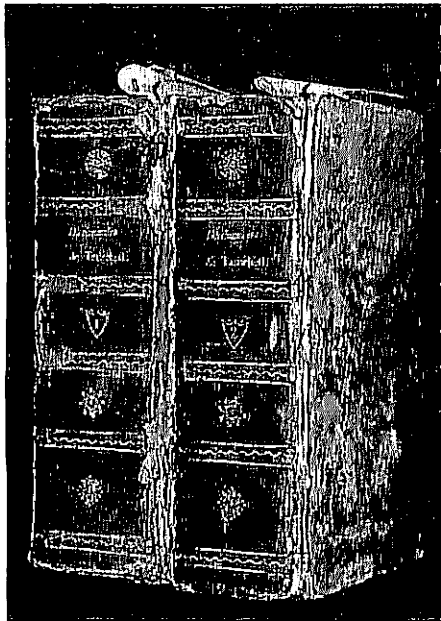
'Baedekr's Russia' (1914) より



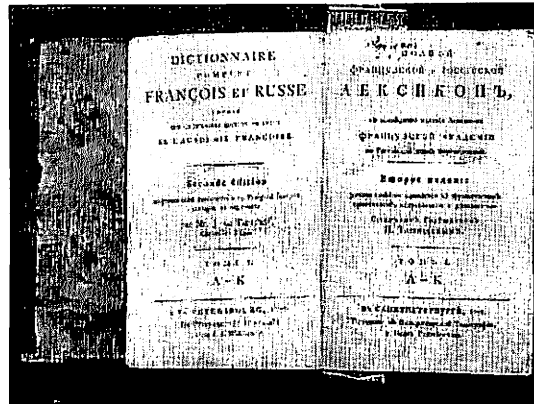
馬場佐十郎の墓（杉並区・宗延寺）
【筆者撮影】



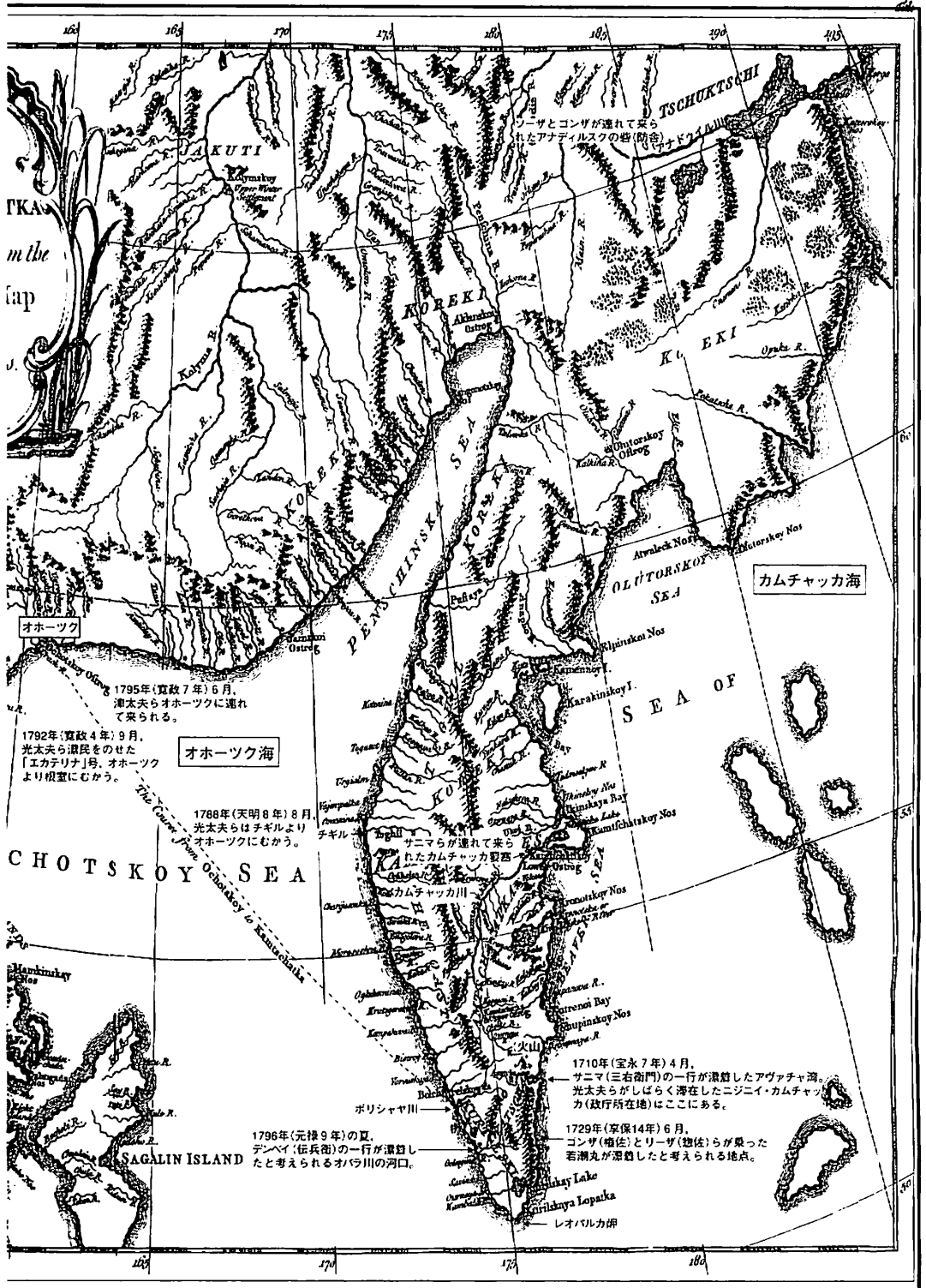
足立左内の墓（杉並区・宗延寺）
【筆者撮影】



J. ドゥ・タシーチェフの『仏露・露仏辞典』（2巻）
【宮城県立図書館蔵】



J. ドゥ・タシーチェフの『仏露辞典』（1798年）の見開き。
【宮城県立図書館蔵】



18世紀の《カムチャッカ半島とその周辺の地図》

S. P. Krasheninnikov: 'The History of Kamtschka and the Kurilski Islands' (1764) 所収の地図をもとに筆者が作図したもの